

## 35. 御船遺跡 第4次調査

### 1. はじめに

御船遺跡は、新湊川西岸の沖積地上に立地する遺跡である。当遺跡は平成8年度の住宅建設に先立つ試掘調査により発見された遺跡で、これまでに3回の発掘調査が実施され、奈良時代～中世に至る各時期の建物や土坑、溝、井戸をはじめ、弥生時代後期の水田跡などが検出されている。なお、調査にあたり東側より順に1～3区の調査区を設定した。

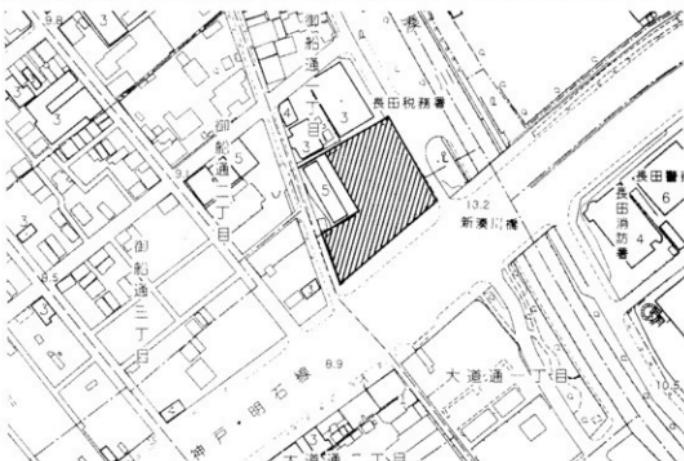


fig. 200  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

#### 基本層序

調査地内の基本層序は北側の1・2区ではほぼ同様の堆積状況を呈し、盛土直下に近世～現代にわたる耕土・床土層があり、中世の遺物を僅かに含む灰褐色砂質土、古墳時代の遺物を含む暗灰褐色砂質土、暗褐色粗砂と続く。暗褐色粗砂層上面で古墳時代の遺構が検出された（第1遺構面）。さらに下層にいぶい黄褐色粗砂層、淡灰色シルトの薄い堆積層があり、黒褐色シルト層となる。いずれも弥生時代後期の遺物を含み、2区では黒褐色シルト面で鞋畔状の隆まりが確認された（第2遺構面）。断ち割り調査の結果から、黒褐色シルト層の下は灰色粘性砂質土、黒色シルト、灰色～灰青色砂質土の堆積が続くことが判明しており、いずれの面においても遺構は確認されていないが、黒色シルト層と灰青色砂質土の境からは弥生時代後期の土器が若干出土している。

調査地南側の3区の基本層序は、盛土の下に近世～現代の耕土・床土層があり、中世の遺物を含む灰色粘土質土、奈良～平安時代の遺物が僅かに混じる灰色粘性砂質土と続く。これ以下、古墳時代の遺物を含む暗灰色粘性砂質土、遺構が確認された黄色極細砂層（第1遺構面）の堆積となる。第1遺構面の黄色極細砂層を除くと1・2区から続く黒褐色シルト層となり、水田畦畔が検出された。2区同様に水田基盤層となる。この層以下についても1・2区と同様の堆積が認められる。下層の黒色シルト層からは弥生土器が僅かに出土しているが、遺構は確認されなかった。

- 1 区** 1区の第1遺構面では柱穴16基、溝2条を検出した。
- 第1遺構面** 調査区内で4本の柱穴が確認できたが全体の規模は不明である。平面検出ができた柱穴の形状は隅丸方形と長楕円形のものがあり、最大径（幅）は70cm～1mである。深さは10～20cmである。柱穴内からの出土遺物が少ないので建物の詳細な時期の決定は難しいが、包含層に含まれる遺物にはまとまりがあり、古墳時代後期の建物になるものと思われる。
- S B101 その他の柱穴からは建物を復元することができなかったが、一辺80cmの隅丸方形の掘形をもつ柱穴も存在しており、S B101と同様の建物が複数存在したものと考えられる。
- 2 区** 2区の第1遺構面では掘立柱建物4棟を含む柱穴約60基が検出された。
- S B201 東西2間（約3.5m）以上×南北1間（約1.8m）以上の総柱の掘立柱建物である。柱穴の掘形は径50～60cmの円形で、深さは約30cmである。
- S B202 東西2間（約3.5m）以上×南北1間（約1.7m）以上の掘立柱建物である。柱穴の規模は長辺90cm～1m、短辺60cmの長方形の掘形のものと50cm前後の方形あるいは円形のものがある。深さは約40cmである。その他、束柱かと考えられる径約15cmの柱穴も認められる。Pit 202-03には柱根が遺存していた。
- S B203 東西1間（約1.9m）以上×南北2間（約3.2m）以上の掘立柱建物である。柱穴には一辺が60cm前後のものと80cmの掘形のものがあり、いずれもやや歪な正方形である。深さは最大で約40cmを測る。Pit 203-03には柱根が遺存していた。
- S B204 柱穴掘形の規模、間隔などから建物として扱うが、東西1間（約1.8m）分しか検出されておらず、不明な部分が多い。方形あるいは長方形の掘形をもち、一辺70～90cmの規模である。Pit 204-02から須恵器が出土しており、6世紀後半の建物と考えられる。
- その他の柱穴は大半が円形の掘形で規模が小さく建物として復元できなかった。

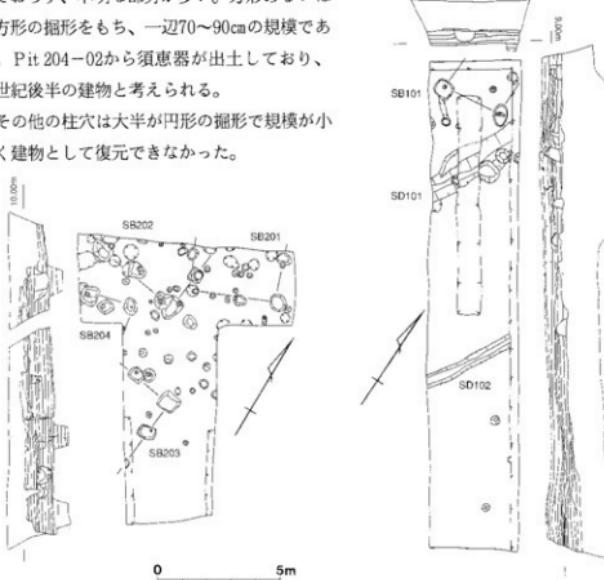


fig. 201  
1・2区  
第1遺構面  
平面図・断面図

- 3 区 3区の第1遺構面では、掘立柱建物2棟、土坑4基、溝12条、竪穴状遺構2基、柱穴65基が確認された。
- S B301 東西3間（約3.8m）×南北2間（約3.0m）の掘立柱建物である。調査区内では柱穴は8基確認されており、柱穴の規模は一辺あるいは径が40~60cmで、方形、円形のものが存在する。深さは10~20cmが遺存していた。
- S B302 東西3間（約5.0m）以上×南北1間（約1.6m）以上の掘立柱建物である。調査区内では柱穴が5基確認されており、平面形は方形、あるいは円形で、規模は一辺（径）約60cm、深さ20~40cmを測る遺物は小片の土師器が出土したに留まる。
- その他の柱穴 その他の柱穴による建物の復元は今回の調査範囲では明確にし得なかったが、1・2区と同様に、柱穴の掘形が方形を呈し、一辺の長さが80cmほどの規模をもつ柱穴も検出されており、調査地周辺においてかなりの建物が存在していたものと推測される。柱穴内からの遺物の出土は少なく、建物を構成する柱穴も含め、詳細な時期については不明である。
- S X301 須恵器杯蓋、杯身、土師器が数点かたまって出土した。検出時に周辺の精査を繰り返し行ったが掘形などは確認されず、遺構面に置かれた状態であったものと考えられる。位置的にS D301に伴い、溝の肩部に置かれた可能性がある。
- S X302 長辺4.2m、短辺2.5m、深さ約10cmの長方形を呈する土坑である。掘形の西辺と東辺に幅20cmの溝が伴い、当初は竪穴住居を想定して検出を行ったが、明確な柱穴が伴わないなど積極的に住居址とする根拠を欠く。遺物も小片の土師器が出土したに留まる。
- S X303 扰乱により大部分が失われているため全体の規模などは不明である。最大で長さ約2.6mが検出された。方形のプランを呈するかと思われ、竪穴住居の可能性もある。須恵器斐片などが出土した。

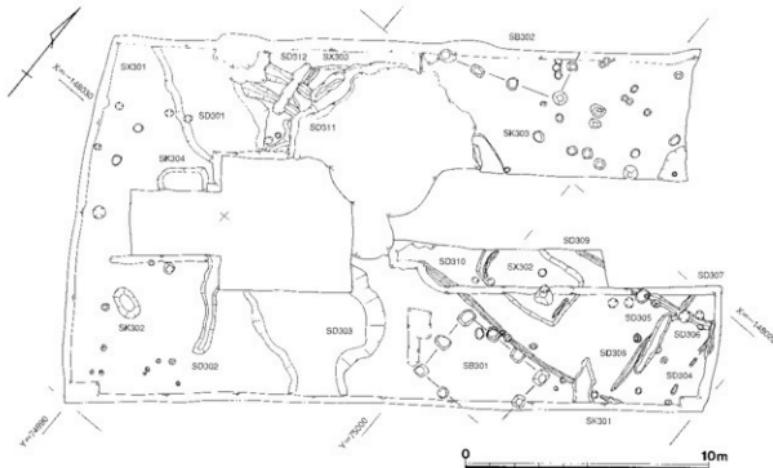


fig. 202 3区第1遺構面平面図



fig. 203  
3区  
第1遺構面全景



fig. 204  
3区  
第2遺構面全景

1 区 第2遺構面では、溝1条を検出した。遺構面となる黒褐色シルト層は、平成9年度の第3次調査において弥生時代後期の水田面が検出された層に対応すると思われる。また2区では畦畔が検出されたが、1区では畦畔などは確認されておらず、幅約2m、上部がSD101により切られるため明らかでないが、深さ20cmほどの溝を1条検出したに留まる。さらに下層の黒色シルト層からは弥生時代後期の遺物が出土したが、これは付近が湿地状態であった時のものと考えられ、遺物は周辺からの流れ込みにより混じったものと判断される。

2 区 第2遺構面では、畦畔1条、地震に伴う噴砂痕跡を検出した。

**畦 畔** 下辺幅約60cm、上辺幅約30cm、高さ約8cmの畦畔と考えられる隆まりだが、東西方向に1mほどが確認できたに過ぎない。畦畔の方向は傾斜地形に沿うものであろう。この他の明確な隆まりは検出できなかった。水田面上には淡褐色砂質シルトが薄く堆積し、さらに上面で古墳時代後期の遺構が確認された黄褐色粗砂の洪水層により覆われている。洪水層からは少量で、磨滅が顕著ではあるが、タカキ目のみえる弥生時代後期の土器が出土、黒褐色シルト面直上の遺物がいずれも弥生時代後期の土器であること、第3次調査の成果をふまえると、今回検出の水田の時期も弥生時代後期と考えて良いようである。水田面では明確な足跡、稲株痕跡などは確認されなかった。

**3 区**

3区の第2遺構面では、調査区の東側を除く部分で水田畦畔が確認された。  
**畦 畔** 畦畔の規模は大半が下辺幅50cm~1m、上辺幅20~30cm、高さ5~10cmで、十字形、あるいはT字形に直交する。また北側で検出した畦畔は下辺幅約1.3m、上辺幅50~80cm、高さ10cmと他の畦畔と比較してやや規模が大きく、この畦畔に続く南側の部分は幅2.5mとさらに幅が増しており、大区画の畦畔と島状の隆まりに相当するものと考えられる。この区画の東側には畦畔は存在せず、幅1.5m、深さ30cmの溝が1条検出された。この溝は前述の2区で検出したSD201から続く一連の溝と考えられる。水田一区画あたりの面積が判明するものの大きさは、それぞれ $3.2 \times 2.3\text{m}$ 、 $3.2 \times 2.7\text{m}$ 、 $3.2 \times 3.3\text{m}$ で、一区画7~11nfほどの小区画の水田であろうと推定される。畦畔の中には自然地形に沿うのか、緩やかに弧を描く箇所があり、また圃場面の高さにも規則性ではなく、どのような配水方法をとったかなど不明な点が残る。圃場面には明確な足跡の痕跡はなかったが、稲株と考えられる痕跡が僅かに認められた。

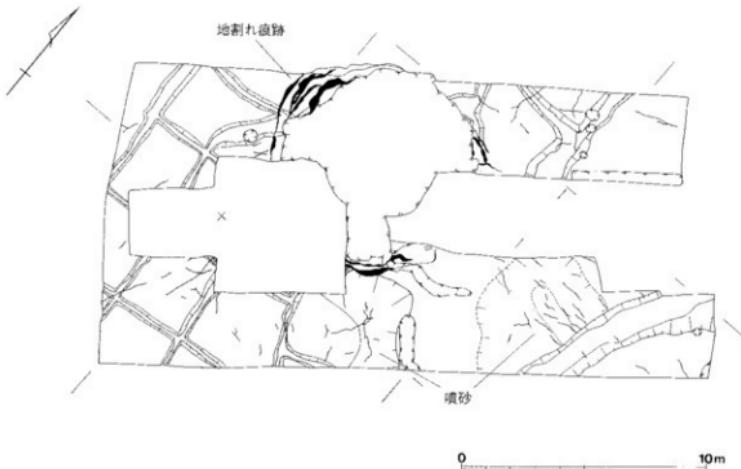


fig. 205 3区第2遺構面平面図

**地震痕跡** 2区の中央部において2条、3区の全域において多数の噴砂痕跡および地割れ跡を確認した。いずれも平成7年に起きた兵庫県南部地震に伴う痕跡と考えられる。

**噴砂**

**地割れ** 調査区中央部にある擾乱に沿って円弧状に検出された。特に西側の部分では幅約10cmの亀裂が四重に巡る状況が確認されており、断ち割りの結果、擾乱の内側方向にノコギリの刃状に落ち込んでいる状況が認められた。この内、外側の地割れ痕跡は調査区の土層断面にかかっており、観察の結果、

黒褐色シルト層の下方約50cmにある粗砂層から噴き出し、この噴き出しに伴う砂自体は途中で消滅するものの、亀裂は地下を蛇行して現代の耕土層にまで及んでいることが判明した。亀裂上部には上層の盛土層の一部が落ち込んでいる。地割れの痕跡ではあるが、当初は噴砂の上界に伴い亀裂が生じ、土壤のしまりの悪い擾乱の埋土が激しく動き、この埋土に引きずられるように擾乱方向に地面がずれたものと推測される。

**3. まとめ** 今回の調査では、古墳時代後期及び弥生時代後期の2期の遺構面が確認された。前回までの周辺における調査では、奈良時代～中世に至る遺構・遺物を中心として確認していたが、今回検出された当該期の遺構は溝2条のみであった。平面調査では明らかにできなかつたが、土層断面では畦畔状の隆まりが認められることから、付近は集落域からはずれた水田などの生産域にあたるものと推測されるが、現段階では不明な部分が多いといえる。今後、周辺での調査が進めば当時の状況などがより明確になるであろう。

古墳時代の検出遺構は掘立柱建物を中心としており、付近における集落の広がりを示唆するものといえる。前回までの調査では遺物は出土するものの、古墳時代の遺構は明らかでなく、また地形的に洪水などにより削られる、あるいは流路が貫流するのではないかと推測されていた南側にも遺跡が延びる可能性が高くなつたといえる。

また弥生時代後期の水田跡が確認されることにより、平成9年度の調査成果と合わせ、水田域がかなり広範囲にわたる状況が明らかになった。水田の規格は今回も先の検出例と同様、10～15m<sup>2</sup>前後の小区画の水田である。水田基盤層には後期の遺物が混じっており、より高位の段丘上などに集落が存在するかと推測される。

さらに今回の調査では、平成7年に起きた兵庫県南部地震の残した痕跡が明確に検出され、地震が地面に及ぼす影響の一端を知る成果が得られた。中でもS X303の埋土の一部は地震による地面のズレに伴って大きく動いており、当初は平面検出などで判断しにくくい状況にあった。今後、周辺での調査時などに一つの目安となる好事例を提供したといえよう。



fig. 206 地割れ痕跡

## みふね 36. 御船遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

御船遺跡は、長らくその存在は知られていなかったが、近年の都市開発によって調査が行われ、次第にその様相が明らかになりつつある。これまで7次にわたる調査が行われているが、特に平成9年度の第3次調査では、弥生時代後期～中世の掘立柱建物や水田などの遺構が確認されるなど、遺跡の様相も徐々に分かってきている。

fig. 207  
調査位置図  
1 : 2,500



### 2. 調査の概要

#### 第1遺構面

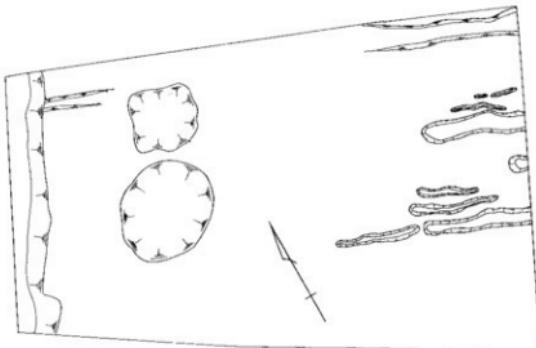
調査の結果、3面の遺構面基盤層を確認した。

第1遺構面は、現代盛土から近代～近世の旧耕土を除去した標高約8.5mの地点で確認した。この面では鐵溝と思われる6条の細い溝とピット1基を検出した。

第1遺構面を形成する基盤層には古墳時代（6世紀）の遺物が含まれており、それ以降の時期に形成されたと考えられる。

fig. 208  
第1遺構面平面図

0 3m



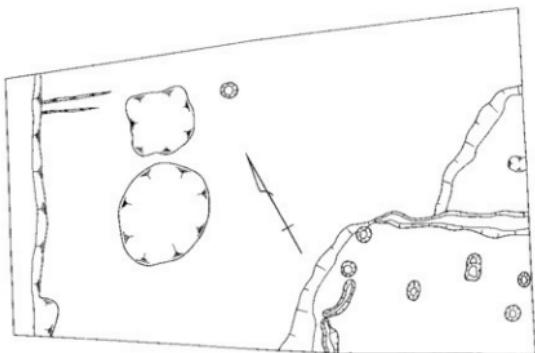


fig. 209  
第2遺構面平面図

**第2遺構面** 第1遺構面の基盤層である暗灰色砂質土とその下層に堆積する古墳時代の包含層である黒灰色粘質土を除去すると第2遺構面の基盤層である乳灰色シルトが現れる。この面では浅い落ち込みの内側でピット6基と溝2条が確認された。

**落ち込み** 調査区の南東隅で確認されたが、調査区外に拡がっており全容は不明である。確認された範囲での最大径は約5.5m、深さは20cm程度である。

落ち込みの内側でピット6基と溝2条を確認した。ピットはいずれも径40cm程度で、深さ10~20cmである。明確に柱穴と確認できるものはなかった。古墳時代の土器の細片が出土している。

溝2条は落ち込みの西端と北側でそれぞれ落ち込みの平面に平行してはしり、幅20~50cm、深さ10cm程度である。

**第3遺構面** 第2遺構面を形成する乳灰色シルトには弥生時代後期後半の土器が多く含まれる。この層より下層では、河川状の堆積がみられ調査区全体が大きな自然河道の一画にあたると考えられる。河道の堆積からは上層から最下層までまんべんなく弥生時代後期後半を主体として、僅かに中期の遺物がまとまって出土した。これらの土器はいずれも比較的大きな破片で、ローリングされた痕跡も認められないことから短期間に一齊に堆積したと考えられる。土層断面などからは、その氾濫源の方向を確認することはできなかったが、現在では調査地の東側数百メートルのところに新湊川が位置している。

**3. まとめ** 今回の調査では、古墳時代以降、古墳時代、弥生時代後期後半という3時期の遺構面を確認することができた。特に古墳時代の遺構面については、本調査地の南隣で兵庫県教委による調査が行われ、同一の土層上面において住居址、溝等を検出しており一連の集落を構成するものと考えられる。

また第3遺構面の河道については前述したとおり短期間に一齊に堆積したものと考えられるが、このような弥生時代後期後半の河道は過去の調査においても複数箇所において確認されている。

## 37. みくら 御藏遺跡（第4・6・8・9・12・17次調査）

### 1. はじめに

御藏遺跡は、刈藻川東岸の標高約4.0～8.0mの扇状地扇央付近に立地している。

当遺跡の周辺は、北西から南東方向に向かって低くなる緩斜面地であるが、西側の刈藻川（現在の新湊川）に沿って形成された自然堤防及びその後背湿地に相当している。

平成2年、御藏通4丁目の地域福祉センター建設工事に伴い発見された遺跡で、その後平成9年市営住宅建設に伴い、発掘調査を実施した（第2次調査）。調査の結果、古墳時代後期の土坑・溝・落ち込み・奈良時代後期の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・落ち込み等を検出した。また第3次調査においても、古墳時代後期・奈良時代後半頃の掘立柱建物・土坑・溝等を検出した。

周辺の遺跡として、刈藻川東岸では、当遺跡のすぐ北方には、弥生時代の集落跡である長田南遺跡が存在しており、そのさらに北側に接するようにして、当遺跡から北方には、弥生時代～古墳時代の集落跡である長田神社境内遺跡が存在している。

また、当遺跡の北東方には、弥生時代の集落跡である三番町遺跡が存在しており、その北側には、縄文時代の集落跡である五番町遺跡が存在している。

一方、刈藻川西岸では、当遺跡の北西方には、弥生時代～中世の集落跡である御船遺跡が存在しており、当遺跡の西方には、弥生時代～平安時代の集落跡である神楽遺跡が存在している。

今回の一連の調査は、御菅西地区震災復興土地区画整理事業に伴う区画街路部分である。

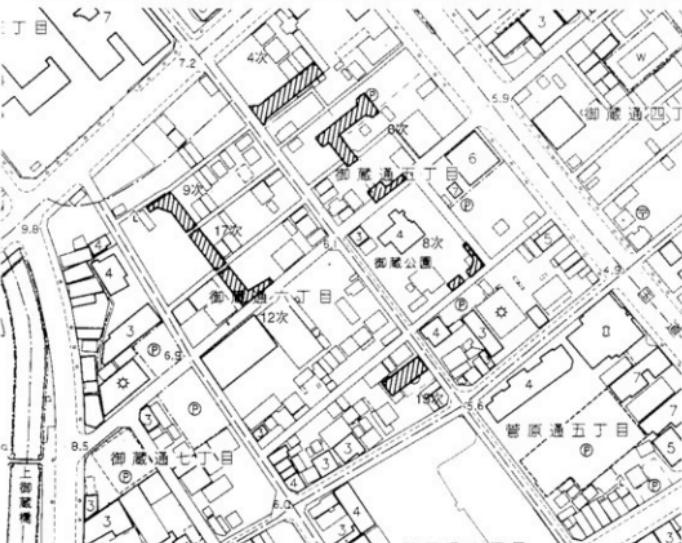


fig. 210  
調査地位図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

### 第4次調査

発見された遺構は溝が2条、ピットが2基のみであった。S D01は調査トレーニチに直交するように見つかった溝で、幅45cm、深さ7cmの浅い溝であった。弥生時代後期のものであろう。ピットは2基発見されたが、遺物の出土は無く、時期は不明である。

### 第6次調査

主に検出した遺構は、溝7条、土坑1、ピット多数である。溝は、古墳時代前期のものが多いが、最終堆積に奈良時代の遺物を含むものもみられこの頃まで機能していたものも存在するようである。

### 第8次調査

主に検出した遺構は、溝5条、ピット多数、落ち込み状遺構である。

溝は古墳時代前期が多数を占め、一部奈良時代・中世以降のものがみられる。

ピットは一辺0.9m前後の方形を呈するものが確認されている。いずれも古墳時代前期に相当する時期のものと考えられる。また、土坑は、布留期のものと考えられる。

### 第9次調査

平安時代の遺構面である。検出遺構は、平安時代の木棺墓が3基・土坑2基・溝1条・

#### 第1遺構面 井戸1基・ピット1基である。

S T01 S T01は、全長2.3m×幅85~95cmを測る木棺墓である。木棺内では人骨を検出しておらず、遺存状況は良好ではないが、ほぼ現位置を保っていると考えられ、頭蓋骨・左右の上腕骨・左右の大腿骨等が部分的に確認できた。

S T02 S T02は、全長1.5m以上、幅85~90cm、深さ10~15cmを測る木棺墓で、埋土内から、平安時代の須恵器・土師器が出土している。

S T03 S T03は、S T01のすぐ西方で検出された全長2.05m、幅80~95cm、深さ10~15cmを測る木棺墓である。埋土内から、平安時代の須恵器・土師器が出土している。

#### 第2遺構面

検出遺構は、北西から南東へのびる溝1条、ピット6基である。ピットは直径20~60cm、深さ10~20cmを測るが、建物としては纏まらなかった。

遺構の埋土より古墳時代前期の遺物が出土し、この頃の遺構面であると考えられる。



fig. 211  
第1遺構面全景

## 第12次調査

## 第1遺構面

遺構面は部分的ではあるが3面存在した。第1遺構面は、中世の遺構面で、溝状遺構とこの溝に切られる浅い落ち込み状遺構が検出された。いずれも少量の土師器・須恵器が出士した。

## 第2遺構面

第2遺構面では、柱穴・溝状遺構・落ち込み状遺構などが検出された。時期は、包含層では出土した遺物から平安時代初頭頃と考えられる。



fig. 212

1トレンチ全景

## 第17次調査

## 第1遺構面

調査区内を北西から南東に流れる河道を検出した。時期としては、12世紀代としておく。今回の調査では、全ての遺構を切っており、時期としては1番新しい時期のものと考えられる。

## 第2遺構面

調査区西半で検出した木棺墓群である。6基が検出された。

## S T01

墓壙は、幅78cm以上、長さ202cm、深さ13cmを測る。棺内の出土遺物の内、1点は「て」の字状口縁を成すもので、時期としては、12世紀初頭の時期が与えられる。

## S T02

墓壙の北半部分のみを検出しており、幅25cm、長さ148cm以上、深さ11cmを測る。棺材は検出されなかつた。おそらくS T01とあまり時期差はないものと思われる。

## S T03

調査区北で検出した木棺墓である。墓壙は北半部分のみを検出しており、幅87cm、長さ126cm以上、深さ14cmを測る。深さは14cmを測る。

## S T04

墓壙は幅98cm、長さ232cm、深さ16cmを測る。木棺は長さ176cm、幅は北小口部で67cm、南小口部で49cmを測り、平面は台形を呈する。深さは16cmを測る。

棺内には頭頂と思われる部分よりやや上に、土師器が割れた状態で3点出土している。また、棺の南西端付近から人骨と思われる骨を検出している他、棺釘も



fig. 213 S T01



fig. 214  
第2遺構面全景

1点骨の付近で検出している。

**S T06** 墓壙は幅83cm、長さ192cm、深さ14cmを測る。木棺痕跡は明確には検出できなかった。

棺内には頭位と思われる部分よりや上に、土師器が1枚置かれていた。棺内の出土遺物から、11世紀後半の時期が与えられる。

**第3遺構面** 6世紀から11世紀にかけての遺構が同時に検出された。溝、柵列、ピット等が検出されている。

**S A201** 南北に延びる2間（南北5m以上）以上の柵列である。柱掘形は、1辺0.5mを測り、柱間は1.8mである。いずれも抜き跡がみられる。SD201と方位が一致しており、何らかの区画があった可能性がある。

**第4遺構面** 第4遺構面のベースである灰褐色シルト層は、今回は水田畦畔は確認出来ていないが、水田耕土である可能性がある。

**3. まとめ** 今回は調査地が御蔵遺跡内の広い範囲にわたっていたために遺構の分布について把握することができた。

最も北に位置する第4次調査地は明確な遺構はほとんど検出されず遺跡の末端に当たるものであろう。中央部の第6・8次調査地においては柱穴等が多数検出されており昨年の第3次調査などの成果も合わせ、周辺が古墳時代～奈良時代の遺構の存在する中心である可能性が高い。

また、西側に位置する第9次および第17次調査では、木棺墓群が検出された。御蔵遺跡における平安時代の木棺墓の確認は初めてである。周辺地域でも、この時代の検出例としては、長田神社境内遺跡があるものの、類例は比較的少ないと言える。

出土遺物においては、第12次調査において、縁釉陶器が出土した。奈良時代の建物群などの存在と合わせて、推定山陽道に沿ってこのような遺跡が存在するのは、郡衙やそれに関連する遺跡なのであろうか。

今後、御蔵遺跡の性格を検討を要する課題が山積している。

## 1. はじめに

御蔵遺跡の範囲内においては、御蔵西地区震災復興土地区画整理事業に伴い、区画街路部分の発掘調査が進められている一方で、換地による住宅や工場等の建設が増加し、工事に先立って復興関連の発掘調査も数多く実施されている。

以下、これらの調査についての概要である。

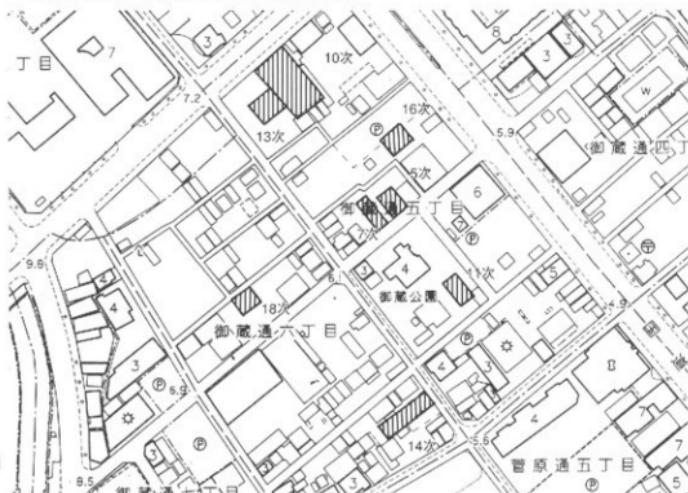


fig. 215  
調査地位置図  
1 : 2,500



fig. 216  
御蔵遺跡遠景

## 第5次調査

1. 調査の概要 今回の調査地は、平成9年に実施された第2次・第3次調査地の中間に位置する。

基本層序は、盛土、旧耕土でその下に包含層である茶灰色シルト、褐色砂混シルト、褐色細砂と続く。古墳時代の遺構面は、褐色細砂の上面である。

検出した主な遺構は、掘立柱建物2棟、溝1条である。

S B01 調査区の南東に位置する掘立柱建物である。柱掘形は直径が80cm位の大きなものである。

S B02 S B01に南接している掘立柱建物である。柱掘形は直径が60cm位の大きなものである。

S B01・S B02ともに埋土は暗黒褐色シルトで埋土内からは須恵器が出土しておらず、細片ながら出土した土師器から古墳時代前期に相当する時期のものと考えられる。

S D01 調査区の北東で検出された、幅50cm、深さ30cmの南北方向にはしる溝である。出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

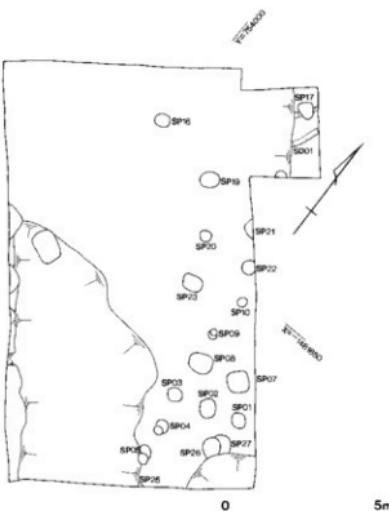
2. まとめ 今回の調査では、古墳時代の掘立柱建物を中心とした遺構を検出した。

掘立柱建物2棟については、同時期で並んで建てられていることから、相互に関連する施設であった可能性も考えられる。

調査区より東側においては、奈良時代の遺構の存在が確認されているが、今回はこの時代の遺物は包含層中に僅かに認められただけで、遺構はみられなかった。周辺の奈良時代の遺構の広がりは限定されそうである。

また、第3次調査で確認された古墳時代前期の遺構の広がりについては、今回も検出されているが、この付近が北東端に近いものと考えられる。

fig. 217  
調査区平面図



## 第7次調査

**1. 調査の概要** 今回の調査地における基本層序は、上から、盛土・旧表土・淡灰色砂質土・暗黄灰色シルト・茶褐色シルト・暗茶褐色シルトとなり、地表下約0.5~0.6mで、古墳時代前期～中期頃の遺物を多量に含む遺物包含層（黒褐色シルト層）に至る。その下層が、暗褐色シルト層で、古墳時代前期頃の遺物を含んでいた。

さらに下層の、地表下約0.7~0.8mで、古墳時代前期頃の遺構面（淡褐色粗砂上面）に至る。

今回の調査区内で検出した遺構は、古墳時代前期頃のピット23基である。直径20~50cm、深さ5~30cmを測る。

いずれのピットも建物としては、纏まらなかった。

調査区のはば中央付近に、幅2.0m×全長9.0mの下層断ち割りトレーナーを設定し、工事影響深度である設計G.L.-1.05mまで、人力により掘り下げた。

下層断ち割りトレーナー内の土層は、上から、淡褐色粗砂・淡灰褐色粗砂・茶褐色シルト・黄茶褐色シルト・青茶褐色シルトとなる。遺構・遺物は確認されなかった。

各遺構および遺物包含層内より、古墳時代前期～中期及び奈良時代頃の遺物が28ℓコンテナ5箱分出土している。

**2. まとめ** 今回の調査では、古墳時代前期頃のピットが検出され、掘立柱建物としての纏まりは確認できなかったが、当該地にも、古墳時代前期の集落跡が拡がっていることが判明した。

また、遺物包含層である黒褐色シルト層内より、布留式併行期頃の土器が、多量に出土しており、当地域における土器編年を検討する上において、非常に注目されよう。



fig. 218 調査区全景

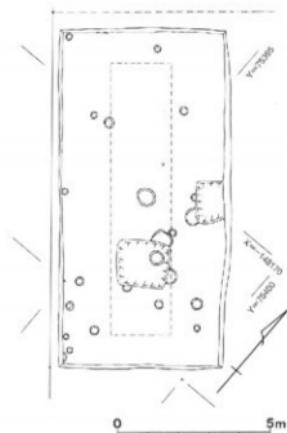


fig. 219 調査区平面図

## 第 10 次 調査

1. 調査の概要 今回の調査においては、3面（第1～3遺構面）にわたって遺構を検出した。出土遺物から判断して、いずれの遺構も弥生時代後期に位置付けられる。

第1遺構面 遺物を包含する土壤層の上面で検出した。主な検出遺構は、柱穴・土坑・溝である。

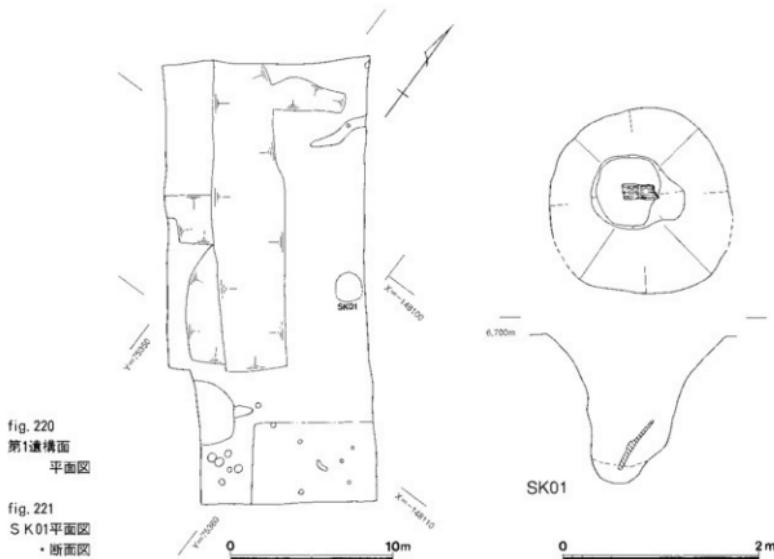
これらの遺構のなかで注目されるのが、土坑（SK01）である。径1.8mのほぼ円形を呈する掘形からなり、横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは1.5mを測る。埋土の上層から弥生時代後期の土器片がわずかに出土している。また、底部では木製の梯子の一部が斜めに置かれた状態で出土している。

この梯子については、①梯子として使用されたもの。②他で使用された後、当土坑内に放り込まれたもの。などが考えられるが、にわかに判断できない。ただし、梯子そのものは土坑の底部にめり込んだ状況ではないことから、①の可能性は高くはないものと考えられる。

なお、柱穴については15穴ほど検出したが、建物を復元することはできなかった。

第2遺構面 土壤層を約10cmほど下げたレベルで検出した遺構である。第1面で検出した遺構とは埋土の特徴が異なることから、第1面の調査で見落とした遺構ではないものと判断し、より古い時期の遺構面として調査を行った。

柱穴と溝を検出した。柱穴は17穴検出したが、建物を復元することはできなかった。溝については、1条検出した。横断面はU字形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。土器等は全く出土していない。

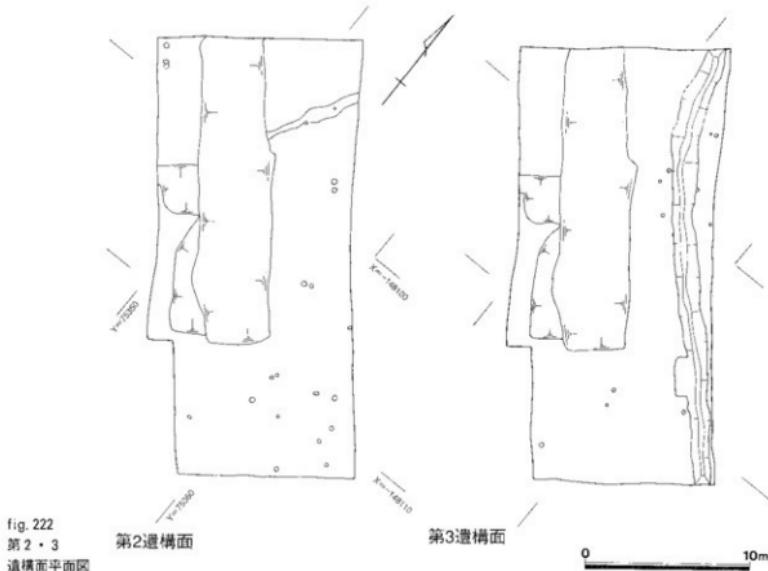


**第3遺構面** 土壌層を完全に掘り下げたレベルで検出した、淡黄褐色シルト質砂をベースとする遺構である。

柱穴と溝を検出した。柱穴は11穴検出したが、建物を復元することはできなかった。溝については、1条検出した（SD03）。横断面はV字形に近いU字形を呈し、検出面における幅約1.5m、検出面からの深さ約80cmを測る。洪水砂により埋没していた。埋土内からは土器の小片がわずかに出土しているが、より細かな時期を特定することは困難である。溝の規模から判断して、用水路としての機能が考えられる。

**2. まとめ** 第1から第3遺構面の3面にわたって弥生時代後期の遺構を検出した。出土土器がわずかであり、しかも小片ばかりであることから、各遺構面のより細かな時期の特定は困難である。しかし、御藏遺跡のこれまでの数次にわたる調査で検出された遺構は、古墳時代前期以降に限られていた。しかし、今回の調査の結果、御藏遺跡が弥生時代後期まで遡ることが明らかとなった。

なお、第1遺構面で検出した土坑（SK01）の機能であるが、井戸あるいは貯蔵穴の可能性が考えられる。前者については、当該期の同様な規模の土坑を井戸とし報告している例が多いこと、砂層を基盤とする土坑の底部が下層のシルトの上面まで掘削されており水が湧きやすい条件にあること等から、その可能性が高い。また後者については、当土坑から出土した梯子が使用された状況を示すものであると断定されればその可能性もでてくるものと考えられる。



## 第 11 次 調査

1. 調査の概要 調査の結果、検出した遺構は古墳時代の竪穴式住居 1 棟と奈良時代の掘立柱建物 4 棟、土坑 1 基や中世の柱穴群などがある。

S H01

調査区北東隅より検出された竪穴住居である。平面形は隅丸の方形であるが検出できた 2 辺とも全体を検出できないため正確な規模は不明である。検出範囲は西辺で 2.8m、南辺で 2.0m である。また、検出面から床面までの深さは 15~20cm 前後である。内部には、柱穴 3 基と周壁溝がある。柱穴は円形で直径が 30cm 前後である。周壁溝は幅 12~18cm、床面からの深さ 10cm 前後である出土遺物から住居の時期は古墳時代前期と考えられる。

S B01

調査区中央で検出された掘立柱建物で、S B02 となり建物の東側のみを検出した。南北棟で N-10° - W に棟軸の方向をとる。規模は桁行 3 間、梁行 2 間以 上の建物で、桁行方向に 6.2m、梁行方向に 4.1m 以上を測る。柱間は桁行方向が 1.9~2.2m、梁行方向が 2.0~2.2m を測り、面積は 25.4m<sup>2</sup> 以上である。

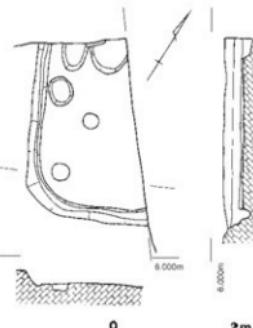


fig. 223 S H01平面図・断面図

S B02

P 4・5・26・40 は並びや形状の酷似から建物と考えた。但し、部分的な検出であるため今後隣接地の調査において改めて検討する必要があろう。今回の調査では建物となる可能性があるという指摘に止めたい。また P 26 は土坑 1 の埋土と解釈して掘削したが底部や周囲の壁の検出状況から柱穴と判断した。

S B03

調査区南西で検出された。S B01 の南に位置する。N-21° - W に棟軸の方向をとる。桁行 2 間以上、梁行 1 間以上の建物である。東辺の柱穴 4 基と北辺の梁行側の柱穴 1 基の

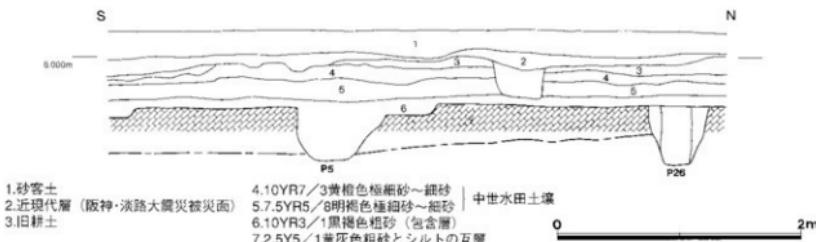


fig. 224 調査区断面図

みを検出したが規模は明らかにできない。規模は検出範囲で桁行方向に3.8m、梁行方向に2.3mを測る。柱間は桁行方向が1.85m、梁行方向が2.3mを測り、面積は8.5m<sup>2</sup>以上と推定される。

柱穴の掘形はやや不定型な楕円形ないし円形でSB01や02とは趣を異にする。規模は直径が40~50cm前後、柱痕の直径不明、深さは20~30cm前後である。

**SB04** 調査区北西で検出された建物で、SB01・02の北に位置する。柱穴P2・3・12・26の4基が検出できた。この一群の柱穴は規模が大型で、柱痕跡も20cm強と太く、柱穴の深さが70~80cmと深い特徴がある。特徴が酷似することや方形に位置することから同一の建物を構成する柱穴と考えた。ただし、本報告では並びを指摘する意味からあえて建物としたが、SB02同様、隣接地の調査において再度検討する課題としておきたい。建物の検出範囲の規模は南北2.0m、東西2.0mであるが大半は調査区外につながると思われ。検出範囲は建物の南東隅の極一部と推定される。この建物はSB01に比べると柱間が狭いのが特徴で総柱構造になる可能性がある。以上のことや柱穴の規模からすると本建物は大型の蔵になる可能性がある。この他、P2・P3は柱痕跡を観察できたが、検出状況からするとP12とP26は調査区外に柱穴が広がるため柱の芯位置を確認できない。また、いずれの柱穴からも柱材の痕跡が認められないことから柱は抜き取られた可能性がある。

**SK01** 調査区北側で検出された。SB02の柱穴P40とSB04のP2と重複して検出された。平面形は隅丸方形で、規模は東西1.8m、南北1.5m、深さ0.3mを測る。埋土は2層にわたって堆積しており、上層が砂層で下層がシルト層であった。土坑底部からは須恵器环身2点が出土した。

**2. まとめ** 今回の調査では、古墳時代の竪穴住居1棟・奈良時代の掘立柱建物4棟・土坑1基、中世の柱穴群などを検出した。前回の第3次調査でも奈良時代などの遺構が多数見つかっており、御蔵遺跡南側に奈良時代の大規模な集落が存在することがわかった。また、古墳時代の竪穴住居の検出から当地点周辺が古墳時代以来陸化の進んだことも判明した。

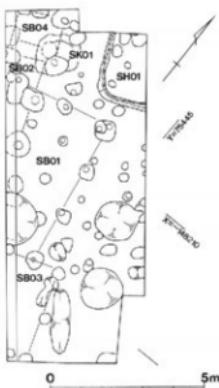


fig. 225 調査区平面図



fig. 226 調査区全景

## 第 13 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査地内には、3層の土壤層（上から土壤層Ⅰ・土壤層Ⅱ・土壤層Ⅲ）が認められ、3面にわたって遺構を検出した。これらの土壤層は、調査区の東側へいくほどレベルが高くなっている。調査区東隅付近では土壤層Ⅰと土壤層Ⅱの間層が認められなくなっている。第1面は土壤層Ⅰの下面で、第2面は土壤層Ⅱの上面で、第3面は土壤層Ⅲの下面で、それぞれ検出した。

第1遺構面 検出した遺構は、SD01の溝1条のみである。断面U字形をなし、検出面における幅50cm、検出面からの深さ約35cmを測る。埋土の特徴から、この溝は洪水により埋没したものと考えられ、埋土内からはわずかに弥生時代後期の土器片が出土している。

なお、第1面を検出すため土壤層Ⅰを掘削中、調査区東隅付近で土器溜まりを検出している。この土器群のなかには河内から搬入された庄内甕が認められることから、この土器溜まりの時期は庄内期と考えられる。

第2遺構面 水田跡6筆を検出した。土壤層Ⅰと土壤層Ⅱの間層にあたる洪水砂に埋没していたもので、北東側の土壤層Ⅰと土壤層Ⅱの間層（洪水砂）が認められない範囲においては、畦畔を検出することはできなかった。水田跡の中央部を北西から南東方向に1条の畦畔がとおり、この畦畔を境に北東側と南西側の水田面のレベルに約20cmの段差が認められた。また、この北西—南東方向の畦畔と平行して、南西側の水田には幅20cm、深さ20cmほどの溝が認められた。この溝は、他の畦畔と交差する地点で途切れているが、この地点を精査した結果

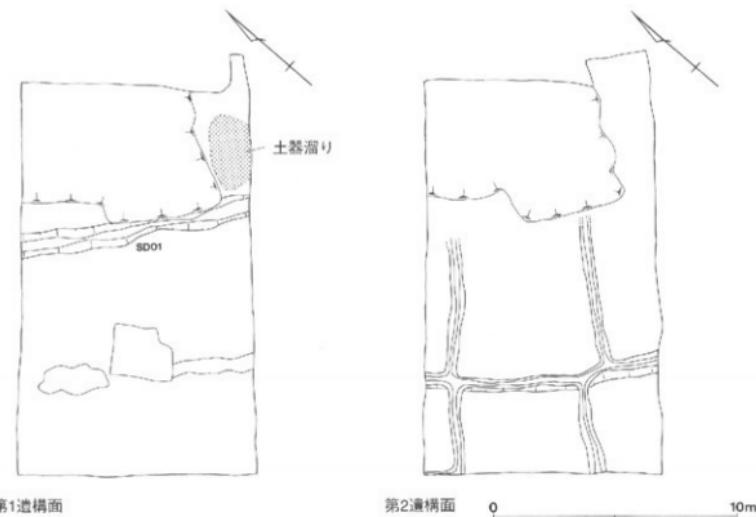


fig. 227 第1・2遺構面平面図

果、溝を埋めて畦畔を造っていることが明らかとなった。このため、当溝は、各水田への配水路の機能を果していたものと考えられ、配水後畦畔との交差部分が埋められたものと考えられる。

**第3遺構面** 柱穴と土坑を検出した。柱穴については50穴以上検出したが、建物を復元することはできなかった。土坑（SK02）は、人為的に埋められたもので、弥生時代後期の土器の小片が少なからず出土している。

**2. まとめ** 3面にわたって遺構を検出した。第1面の上層にある土壌層Ⅰ内で庄内期の土器溜まりを検出したことから、これらの遺構は庄内期以前と限定される。ただし、各遺構内から出土した土器はいずれも小片であり、より細かな時期を特定することは困難である。

今回検出した遺構は弥生時代後期に限定されるが、水田跡はこれまでの調査では明らかとなっていたいなかったものである。水田跡は、第10次調査の最下層で検出した柱穴群に層位的に対応するものである。水田跡は、柱穴群に対して低地に位置することから、当該期の微地形と土地利用の関係を捉えることができ、大きな成果といえよう。

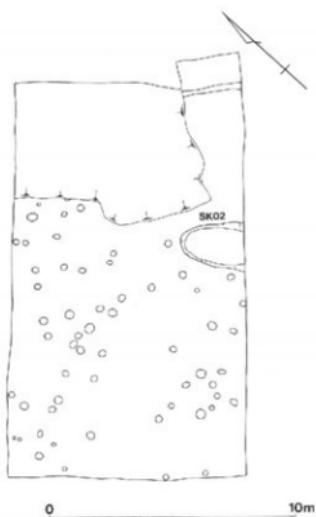


fig. 229 第3遺構面平面図

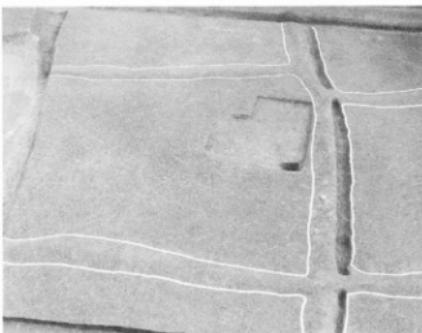


fig. 228 第2遺構面水田



fig. 230 第3遺構面全景

## 第 14 次 調 査

### 1. 調査の概要

調査地の基本層序は、上層から現代盛土、旧耕土をへて、古墳時代中期の土器を含む包含層が堆積し、遺構面基盤層となる。周辺地区での過去の調査結果や、当地区の試掘時のデータからみて、今回の調査で確認した遺構面の下層に、さらに古い時代の遺構面が存在する可能性が高いと考えられる。

なお、遺構面を形成する層は、調査区のうち東半分にのみ堆積しており、調査区の西半分は、遺構面基盤層と淡黄灰色粘土が置換している。したがって、遺構は主に調査区の東側で検出され、西側ほど遺構の密度は希薄となる。遺構面直上に堆積する包含層の堆積も調査区の東側のみで確認され、西側には堆積していなかった。調査区の西半と東半では遺物の出土量にも差があり、東側に偏っていた。

包含層から出土した遺物は、古墳時代中期の土器を主体としてわずかに中世の土器が混じっていた。

#### 検出遺構

検出した遺構は、溝 2 条、土坑 1 基およびピット 2 基である。

S D01

調査区の東端で検出した、幅20cm、深さ20cmの南北に走る溝である。埋土は包含層と同質の黒灰色粘質シルト単層である。古墳時代中期の土器片が数点出土している。

S D02

調査区の南側で検出した、幅80cm、深さ10cmの東西に走る溝である。SD02が細く深いのに比べ、浅く平面形も不規則である。溝ではなく、単なる窪みの可能性もある。埋土は単層で、遺物は出土しなかった。

SK01

調査区の東端、SD01の直近の西側で検出した。径65cm、深さ40cmだが、断面形はフラスコ状に、下ほど広い。埋土は黒色粘土で炭を多く含んでいる。

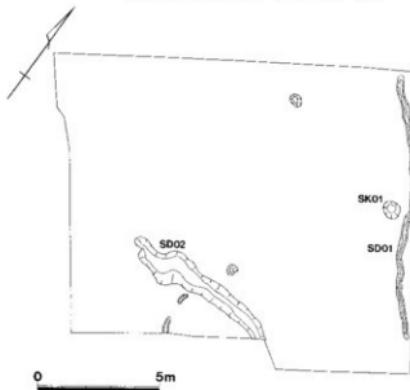
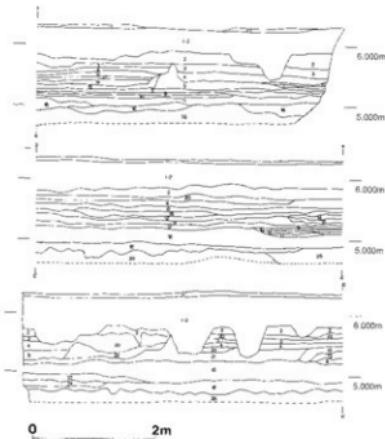


fig. 231 調査区平面図



1. 現代盛土
2. 黒灰色粘土（現代耕土）
3. 黄灰色粘土
4. 隆起黄灰色粘土
5. 青灰色粘土
6. 底青黃色粘土
7. 淡灰黃色粘土
8. 明黃橙灰色粘土
9. 灰色粘土
10. 灰黃色粘土
11. 離壁土粘土
12. 青灰色シルト質粘土
13. 淡黃灰色シルト質粘土
14. 回色シルト質粘土
15. 黄灰色粘土
16. 黑灰色粘土
17. 淡灰黃色シルト質粘土
18. 青色粘土
19. 明灰黃色粘土
20. 黄色粘土質粘土
21. 離青色粘土
22. 増青色粘土
23. 淡青色粘土
24. 増灰古色粘土（2.~15.、17.~24. 旧耕土）
25. 黄灰色砂質粘土
26. 淡黃灰褐色粘土（25. 26. 遺構基盤層）

fig. 232 調査区断面図

検出面直上に、奈良時代の硯片が張りつくように出土したが、後世の混入の可能性もある。この破片以外遺物は皆無のため、遺構の時期は不明だが、埋土の質が他と異なるため、他より新しい時期の可能性がある。

**ピット** 検出したピット2基は、どちらも径50cm程度で、深さは25cm程度である。SD02と同質の埋土で単層である。遺物は時期の分からない小片がわずかに出土した。機能等は不明である。

**2. ま と め** 今回の調査は、遺構が比較的希薄な地区であった。検出した遺構は出土遺物から、古墳時代中期の可能性が高い。

これまで御歳謹跡は、奈良時代から古墳時代後期を中心とした遺構が多く確認されている遺跡であるが、今回その時期に該当する遺構面は確認できなかった。

今回の調査では、地表面よりマイナス1.6m付近で最初の遺構面を検出し、それより上層は旧耕土とその床土の堆積の連続であった。今回、中世の遺構面が確認できなかったのは、旧耕土による削平の可能性が考えられる。古墳時代中期の遺構面についても調査区東側では包含層、基盤層とも明瞭に確認できたが、西半分では基盤層は還元状態の粘土層に置換しており遺構も確認できなかった。あるいは集落の最末端部分の可能性もある。

また、これ以下の層については、今回工事影響深度外のため調査されなかったが、試掘調査の結果や周辺の状況から遺構面の存在する可能性が高い。

検出した遺構はわずかであるが、土層の堆積状態の観察から、今回の調査面より上位および下位に遺構面が複数存在する可能性の高いことが確認できた。また遺跡の範囲を知る上でも東側ほど濃密に遺構が存在し、西側ほど希薄であるなど、今回のデータが有効に活用されるものと考えられる。

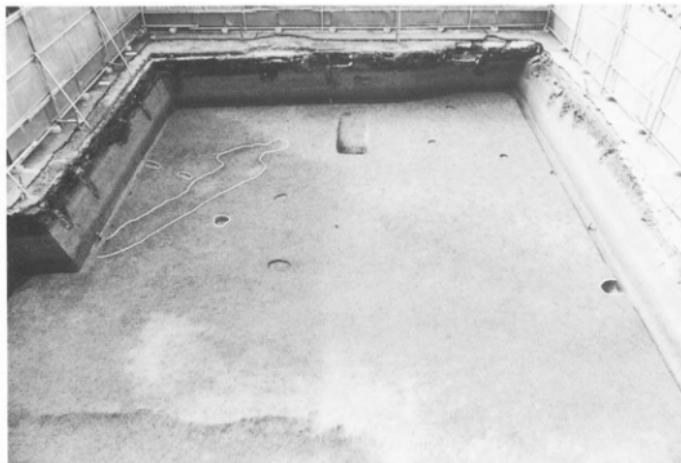


fig. 233  
調査区全景

## 第 16 次 調 査

1. 調査の概要　調査地は第6次-2調査（区画街路部分）地点の東側に隣接する。

基本層序　今回の調査では、遺構面が2面確認できた。

基本層序は一様ではなく、盛土・搅乱・耕土に統いて旧耕土が何枚か確認できる。これらの旧耕土直下が第1遺構面となるが、削平のため基盤層である黄色シルト質極細砂層を遺構面とする範囲と、さらに下層の弥生時代後期末の遺物包含層である暗褐色系細砂質シルトの上面を遺構面とする部分がある。そして、暗褐色系細砂質シルトを除去した、黄色シルト質極細砂層が第2遺構面となり、さらに下層は厚く砂層が堆積している。

第1遺構面　第1遺構面において確認できた遺構には、奈良～平安時代のものと考えられる掘立柱建物、柱穴、溝、落ち込みがある。

ただし、それぞれの遺構の時期を明確に示す出土遺物が少なく、詳細な時期は現状では不明である。

S B101　 $2 \times 2$ 間（東西3.5m×南北3.8m）の掘立柱建物である。主軸が座標北から約18°西へ振っている。柱痕をもつのは建物中央のP 5のみで、側柱はいずれも柱材が抜き取られているようで、遺構面近くまで達する柱痕が確認できていない。

柱穴掘形はいずれもやや楕円形で、長径約60～70cmで、最大深さ70cmである。また、P 5では掘形底部に板材を使用した礎盤が遺存している。P 9では掘形内下層から凸面に格子叩きの施された平瓦片が出土している。

S D104　南北方向に延びる溝状遺構で、S B101と同一時期のものと考えられる。幅40cm前後、深さ約10cmで、検出長の中央付近から二股に分岐する。埋土は淡灰白色シルト質細砂である。

S P101　1区西端で確認した一辺約70cm、深さ40cmの隅丸方形の掘形に、直径20cm、深さ40cmの柱痕をもつ大型の柱穴である。出土遺物が小片のため、時期不明であるが、埋土の違いからS B101よりも遅い時期のものと考えている。



fig. 234 第1遺構面平面図



fig. 235 第1遺構面全景

S P102 一辺約50cm前後、深さ40cmのやや不整形な隅丸方形の掘形に、直径15cm前後、深さ40cmの柱痕をもつ柱穴である。両者の柱間距離は1.8mである。出土遺物が小片のため、時期は不明であるが、埋土の違いからS B101よりも遅い時期のものと考えている。

S D101 南北方向に延びる溝状遺構で、いずれも幅1m前後、深さ約10~20cmである。

~113 遺構の切り合い関係から、S B101よりも古い時期のものであり、溝間が1m前後で削っており、それぞれの方向性も同じ点から鍛溝である可能性が高い。

**第2遺構面** 確認できた遺構には、弥生時代後期末のものと古墳時代後期のものがあり、柱穴、溝、落ち込みがある。

S X201 北半部で確認した幅2m以上、深さ10~15cmの落ち込みで、緩やかに湾曲する溝状遺構として終息する。北端部の土坑状の落ち込みからは弥生時代後期末の土器がまとまって出土している。埋土は乳灰褐色シルト質極細砂である。

S X203 調査区南半部で確認した東西5.5m以上、南北2.2m以上、最大深さ25cmの不整形の落ち込みである。上層部で完形品を含む弥生土器が28ℓ入りコンテナで3箱分まとめて出土している（土器群a）。また、土器群（b）の範囲を含む灰色シルト層を埋土とする東端の落ち込みからも大型の弥生土器片が出土している。いずれも弥生時代後期末のものと考えられる。

S X202 S X201を切る検出長3m以上の東西方向の落ち込みで、深さは約30cmである。古墳時代後期初めの須恵器片・土師器片が出土している。埋土は乳褐色シルト質細砂である。周壁溝や床面に主柱穴は確認できていないが、竪穴住居の可能性がある。

**2. まとめ** 今回の調査では、官衙関連の遺構と推定される掘立柱建物1棟が調査区内で完掘でき、さらにこれを遡ると推定できる柱穴も確認できた。また、第2遺構面では弥生時代後期末の土器が落ち込み内からまとめて確認できたことが成果として挙げられる。

今回の調査範囲では調査面積も限定されており、遺跡全体の様相を推し量るまでには到底至らない。今後、御苦西地区の区画整理事業に関連する調査の進捗に伴って、徐々に遺跡の全容が鮮明にされていくものと考えられる。

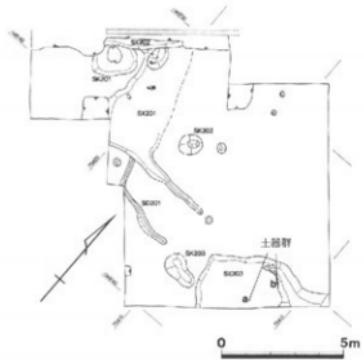


fig. 236 第2遺構面平面図



fig. 237 S X203

## 第 18 次 調査

1. 調査の概要 主に検出した遺構は、土坑1基（SK01）、井戸1基（SE01）、溝3条（SD01～03）である。

SE01 調査区の西に位置する井戸である。井戸枠等は、すべて抜き取られていた。埋土および、底部の平面観察から、本來は1辺0.7mのプランをもつ方形の井戸であったと考えられる。掘形の直径は1.5mを測る。井戸内部から農具の柄等の木製品が出土している。

井戸埋土上層からの出土遺物のなかに、口縁端部が三角形となる外面一段なでの土師器皿が出土していることから、12世紀後半には埋没していたと考えられる。

SK01 調査区の北に位置する土坑である。土坑の規模は、長辺1.6m、短辺1.2m、深さ70cmを測る。土坑内の埋土は、すべてブロック状になっており、人為的に埋められたものと考えられる。土坑内部の上層からは馬の歯と思われるものが出土しているが、土器はいずれも細片である。遺構の性格については不明である。出土遺物から、遺構が埋められたのは、12世紀頃と思われる。

SD01 調査区中央に位置し、幅0.5m、深さ20cmを測り、東西方向から南西方向に走る溝である。SD02・SD03と切り合い関係にあり、全ての溝を切っている一番後出の溝である。出土遺物から、古墳時代と考えられる。

SD02 調査区の中央を南北方向に走る、幅0.8m、深さ20cm程度の溝である。出土遺物から、  
・03 古墳時代と考えられる。

2. まとめ 今回の調査では古墳時代の溝と中世の井戸を確認した。当調査区の北側では、11世紀代の墓域が確認されており、また、東側の大型の建物群の検出される地域とも異なった状況を示しているようである。今後の調査の進展によって、集落の移動の状況が次第に明らかになるものと考えられる。

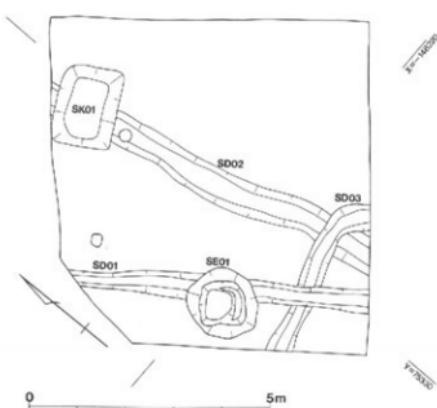


fig. 238 調査区平面図

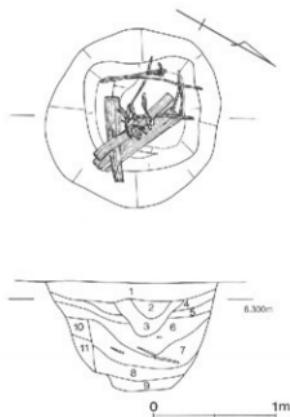


fig. 239 SE01平面図・断面図

## かぐ 5 39. 神 楽 遺 跡 第 11 次 調 査

## 1. はじめに

神楽遺跡は、刈藻川と妙法寺川によって形成された扇状地上に位置している。これまでの数次にわたる調査で、神楽町2丁目周辺を中心に、弥生時代後期、古墳時代、平安時代の遺跡の存在が判っている。

fig. 240  
調査地位置図  
1 : 2,500



## 2. 調査の概要

## 基本層序

調査地の基本層序は、第1層：現代の盛土、第2層：旧耕土、第3層：黄灰色シルト質細砂（近世の水田土壤）、第4層：褐灰色粗砂混じりシルト（平安時代の水田土壤）、第5層：暗灰色粗砂混じりシルト（古墳時代の水田土壤）、第6層：黒褐色粗砂混じりシルト（弥生時代～古墳時代初頭の遺物包含層）、第7層：灰褐色粗砂層、第8層：黄褐色シルト層である。

## 検出遺構

重油タンクや建物の基礎等の搅乱以外の部分において、弥生時代前期の土坑および溝、

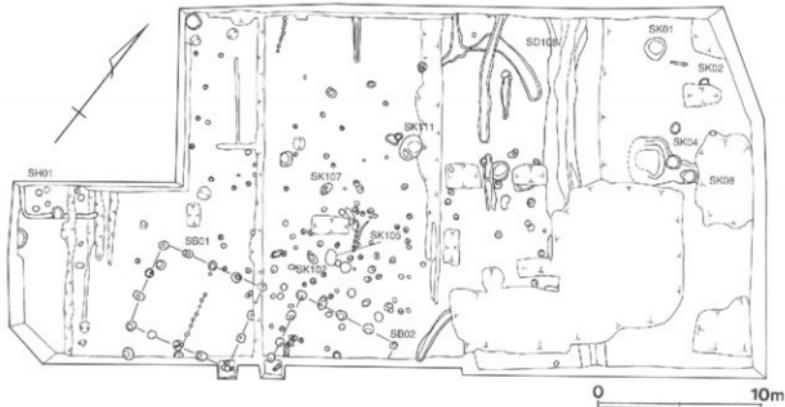


fig. 241 調査区平面図

- 古墳時代初頭～中期および中世の遺構を検出した。主だった遺構は以下のとおりである。
- 弥生時代前期** SK02は、長軸2.4m×短軸1.4m×深さ0.14mの不定形な浅い掘り込みに、壺や甕など数個体分の破片が残されていた。微高地の落ち際に位置しており、もともと明確なプランをもつものではないと考えられる。
- SK105** SK105は楕円形上の土坑に蓋形土器が横倒しの状態で出土した。土器棺墓等の埋設遺構の可能性を考えたが、他の土器は認められなかった。ただ、蓋形土器についても上半部は削平されていることから、土坑内の土器が持ち出されたとも考えられる。また、近接するSK102からも前期の土器が出土しており、何らかの関連性が考えられる。
- 弥生時代後期** SK01は、直径1.3m、深さ1.3mの円形の掘り込みであり、断面形は下膨れの袋状となる。古墳時代初頭これは砂層まで掘り抜いたために、下層の壁が崩れたためかもしれない。埋土は湿地性
- SK01** 黒褐色シルトで、徐々に埋まったものとみられる。
- 掘形内からは、長さ1.5mの丸木の半割り材が斜めに立てかけられた状態で出土した。材の下には、沈下防止のために、土器の破片を敷いていたらしい。材の下端は斜めにカットされ、中程2箇所にも抉り込みがあり、おそらく穴の昇降の際の梯子代わりにしたものであろう。
- また最下層からは、ほぼ完形に復元できる甕1個体と、イノシシとみられる獸骨が出土した。甕の時期は、布留式の古い段階に位置付けられるものである。甕の外面には編み籠の痕跡が認められ、井戸の釣瓶に用いられたものとみられる。
- SK04** SK04は、直径0.8m×深さ0.6mの円形の掘り込みで、SK01と同様、断面形は下膨れの袋状となり、湿地性の黒褐色シルトで埋まっている。弥生時代後期の甕の底部が出土し

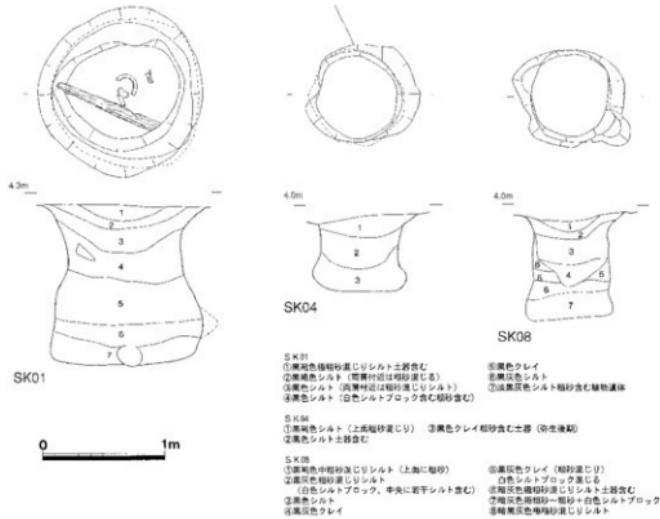
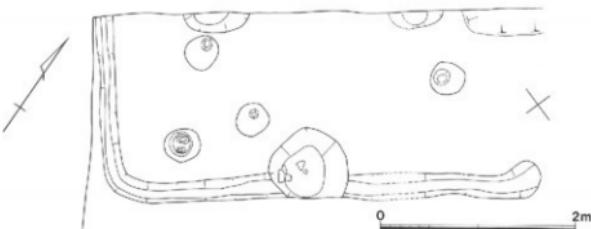


fig. 242  
SK01・04・08  
平面図・断面図

fig. 243  
S H01平面図

ている。土坑の形態からみて、貯蔵穴として用いられていたものと考えられる。

**S K08** S K08は、直径0.8m×深さ0.8mの円形の掘り込みで、S K04のすぐ横に位置し、ほぼ同形同大であることから、これも貯蔵穴であろう。

**竪穴住居** S H01は、上面の削平が激しいものの、辛うじて周壁溝を伴う床面のみ検出できた。

**S H01** 規模および形態は、周壁溝の形状から一辺約4.5mの隅丸方形住居と推定される。主柱穴は、おそらく4本であろう。また、住居南壁には小土坑が接し、土器も数点出土した。出土した土器から古墳時代の初頭と考えられる。

**掘立柱建物** 2棟を検出した。規模は、2棟ともに3×4間で内部に主柱穴を有しないタイプのものである。相互に位置関係に若干のズレがあるものの、ほぼ同一軸の方向で建てられており、

**02** 同時期が非常に近接した時期のものと考えられる。時期の指定は困難だが、S B01の掘形内より出土した共伴関係の須恵器から5世紀末から6世紀初頭と考えて良かろう。

**その他の遺構** S D108は調査区東側で検出した南北方向の溝である。微高地の落ち際を南北にとおるこの遺構の性格については不明であるが、集落を機能的に区画するようなものであったとも考えられる。この遺構の時期については、確実に共伴するかどうか不明ながら、最下層において弥生時代前期の土器が出土している。

S K107とS K111はともに7区で検出した。S K107は、ほぼ関係の瓦器碗が1点出土した。またS K111は、検出した遺構のうち、もっとも良好な掘形をもつので、6世紀

fig. 244  
調査区全景

代の須恵器と土師器が出土した。

**微高地落ち際** 調査区の北部において2カ所を検出しており、途中が搅乱で失われているが、両者は本の產地 来つながっていたのであろう。縄文時代の終わり頃か弥生時代の初め頃に、この西側に微高地が生じたために、相対的に低くなつた微高地の落ち際が湿地化したものと考えられる。断ち割り調査の結果でも、この下に旧河道は認められなかった。

この窪地は湿地性の黒褐色シルトで埋まっており、下層からは弥生時代前期の土器が出土した。後期以降の遺構は、ある程度シルトが堆積した上から掘り込んでいるようである。貯蔵穴とみられるSK04・SK08は、この土地条件を狙って場所を決めているようである。

**3. まとめ** 今回の調査では、弥生時代前期から古墳時代前期～中期、平安～中世の遺構を検出したが立地上、東から西へ緩やかに上がっていき微高地形の大半は、後世の水田および畠地等による削平を受けており、辛うじて検出した遺構も非常に浅く不明瞭なもののが多かった。

検出した遺構のうち特に古墳時代前期には竪穴住居を、また中期には3×4間の比較的大型の掘立柱建物2棟を検出したことから、居住域が調査区の西半部の微高地上を中心として展開することが看取される。

以上のこととは、本調査区周辺の遺跡の範囲や規模、また性格を考える上で非常に貴重な資料である。

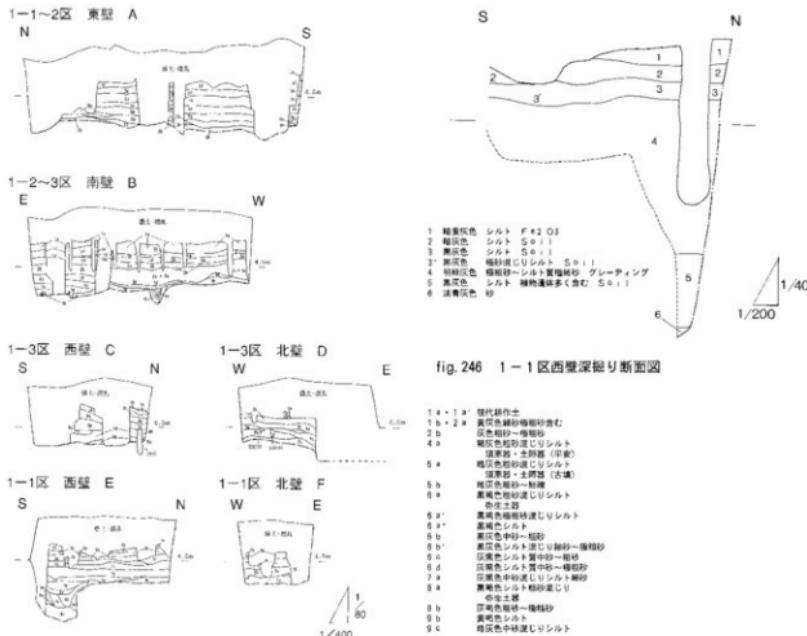


fig. 245 調査区壁面断面図

fig. 246 1-1区西壁深掘り断面図

- 1 a + 1 a' 現代耕作土
- 2 黒褐色シルト含む
- 2 b 黄褐色細粒粘土
- 3 黑褐色シルト
- 4 a 黑褐色シルト
- 4 b 黑褐色シルト
- 5 a 黑褐色粗粒シルト
- 5 b 黑褐色粗粒シルト
- 5 c 黑褐色粗粒シルト
- 6 砂
- 7 a 黑褐色粗粒シルト
- 7 b 黑褐色粗粒シルト
- 7 c 黑褐色粗粒シルト
- 8 a 黑褐色シルト
- 8 b 黑褐色シルト
- 8 c 黑褐色シルト

## かぐら 40. 神楽遺跡 第12次調査

### 1. はじめに

神楽遺跡は、新湊川（茹藻川）の下流西岸に形成された標高4~14mの自然堤防上に立地している。

当遺跡は、現在のところ北端が川西通3丁目~水笠通1丁目にかけての範囲で、細田町2丁目~細田町5丁目を含み、南端が神楽町1丁目~神楽町6丁目にかけての南北0.4km、東西0.6kmの範囲に分布していると考えられる。



fig. 247  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

#### 1 区

調査区は、東に向かい落ち込んでおり、微高地の端部に位置していると思われる。

1区の北半において、地表下約1.0~1.2m（標高約3.90~4.00m）で、淡黒灰色砂質土（弥生時代前期・後期の遺物包含層）に至る。その下層の黄褐色シルトの上面が、遺構面となっており、土坑が2基（SK01・SK02）検出されている。

#### SK01

SK01は、1区の北西側で検出された楕円形の土坑で、長径140cm×短径100cm、深さ約26cmを測る。埋土内より、遺物は出土しなかった。

#### SK02

SK02は、SK01の南方約1.0mで検出された楕円形の土坑で、長径84cm×短径72cm、深さ約26cmを測る。埋土内より、弥生時代前期の可能性をもつ土器の細片が出土している。

1区の南半において、地表下約1.0~1.1m（標高約4.00~4.10m）で、黒灰色砂混じりシルトに至る。その下層の暗黄褐色シルトの上面が、遺構面であるが、牛と思われる足跡が多く検出された他には、遺構は確認されなかった。

この足跡は、本来は、黒灰色砂混じりシルトの上面から踏み込んだものであると考えられ、時期は不明であるが、足跡の方向には、規則性があり、水田に伴うものであった可能性が高いと思われる。

2 区 調査区の大半が、既存建物の搅乱により、著しく削平されていたため、遺構面の残存状況は、良くなかった。

溝が3条（SD01～SD03）、ピットが6基のみ検出することができた。

SD01 SD01は、2区の東側で検出された東西方向にのびる溝状遺構で、全長3.5m以上、幅20～60cm、深さ5～10cmを測る。

SD02 SD02は、2区の西側で検出された北西から南東方向にのびる溝状遺構で、全長9.0m以上、幅1.7～2.0m、深さ20～30cmを測る。

SD03 SD03は、SD02の東方約1.0～1.5mで検出された南北方向にのびる溝状遺構で、全長3.0m以上、幅1.4～1.7m、深さ20～25cmを測る。

いずれの遺構も、埋土内の出土遺物が小片のため、時期を特定することは難しいが、弥生時代後期頃のものである可能性が考えられる。

3. まとめ 今回の調査地においては、既存建物による搅乱が著しく、遺構面がかなり削平を受けていたため、遺構の分布状況は、やや希薄であった。

また、神楽遺跡の縁辺部に位置しているため、過去の調査例と比較すると出土遺物の量も、かなり少なめであった。

また、調査当初予想された奈良時代～平安時代の遺構は検出しなかった。

しかしながら、1区において、弥生時代前期の可能性のある土器片が、出土しており、隣地の第11次調査の成果を含めて検討すると、当該地周辺に、弥生時代前期の集落跡が存在している可能性も考えられるであろう。

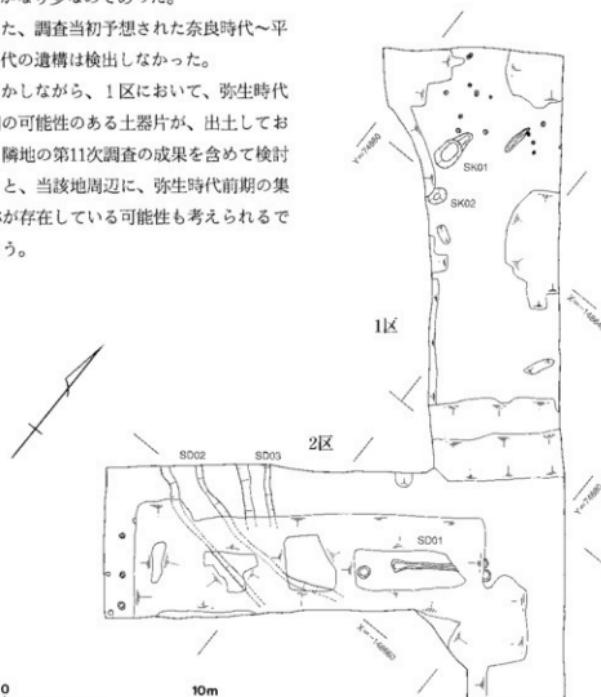


fig. 248  
調査区平面図

## 41. 松野遺跡 第6次-2・7次調査

### 1. はじめに

松野遺跡は、昭和56年度に松野通4丁目で市営松野住宅建設に伴い弥生時代前期の土器片が発見されたを契機に発掘調査が実施された。古墳時代後期初頭の濠と柵に囲まれた豪族の居館址やこれに付随すると考えられる掘立柱建物や堅穴住居などが検出された。

遺跡は、妙法寺川と刈藻川に挟まれて形成された緩扁状地性低地に立地する。遺構面の標高は約6~8mである。

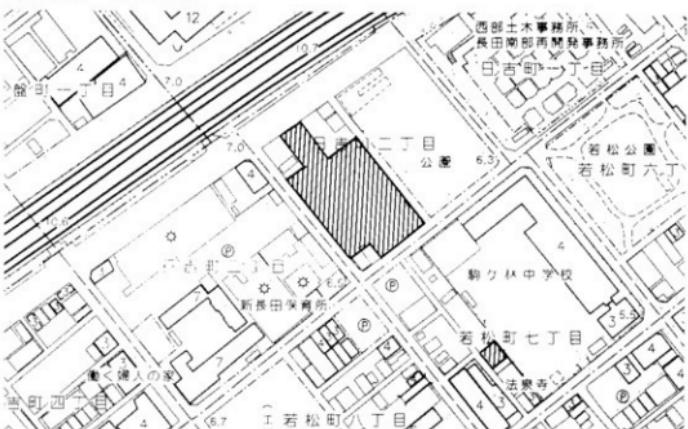


fig. 249  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

今回、検出された遺構は、堅穴住居、掘立柱建物、井戸、溝、土坑、ピット、落ち込みなどがある。

**堅穴住居** 堅穴住居は、4棟が検出された。すべて古墳時代のもので、一辺4~5m程度の規模をもつ隅丸方形の平面形である。

S B103からは、完形品の土器が多く、遺棄された状況で出土している。

**掘立柱建物** 掘立柱建物は、計15棟が検出された。うち2棟（S B103・S B108）については、中世の建物で、他は古墳時代のものと考えられる。

**井戸** 井戸は、6基検出された。S E103は中世の遺構で、他は古墳時代のものである。

S E102は、円形で2段の素掘り井戸で、下層から土師器壺と須恵器蓋・甕とともに、滑石製円盤・臼玉、完形の堅杵・桜の皮・加工木・枝材などが出土している。

**落ち込み** S X122は、東西12m、南北12m以上、深さ60cmの大きな落ち込み状遺構である。堆積土から湿地もしくは沼状の遺構と考えられる。須恵器壺身・蓋・高杯・甕・甕・器台、土師器壺・甕・高环などが多く量に出土した他、遺構周辺からは、臼玉、有孔円盤、剣型石製品、勾玉模造品、およびこれらの未製品、滑石原石が数多く出土した。

### 3. まとめ

今年度の調査では、下層遺構の検出があり、また粗砂層の堆積土内に縄文時代晩期の土器・弥生時代前期の土器の出土があり、これまでの成果に新たな知見が加わった。

また第6次～2区の調査によって遺跡は、南北約300m以上のひろがりをもつことが判った。

過去3年度にわたる調査から、遺構のみの有り様としては、掘立柱建物、竪穴住居、溝状遺構などから古墳時代の一般的な集落と捉えられる。しかしながら多量の土器や白玉、滑石・碧石原石などの出土は、集落の性格を考える上で重要な事項となるであろう。

これに付け加えるならば、第1～3次調査での柵と溝で囲まれた建物群は、一般的な集落と全く異質な遺跡であった。このように第1～3次調査と第4～7次調査とは異質である。地形や時期差による建物の方向の差異もあるうが、建物の方向性にも第1～3次調査と第4～7次調査とに決定的な差異があるように思われる。

S D101やS X122での多量の白玉の出土は、水辺での祓を想起させる。調査区を北から南へ貫流するSD111・SD101とこれとほぼ直行するSD126(S D3001)の存在は、排水機能以外に集落の区画の機能を考えねばならない遺構であろう。そして区画周辺と水辺での祭祀がどのような関わりがあるのか追求すべき重要な課題である。

また、玉類を伴う遺構とそれに関わる土器や建物の時期差、掘立柱建物と竪穴住居の組合せ、区画と建物の組合せなど様々な検討を加える必要がある。そして遺構と遺物の関係をより詳細に検討することによって集落の性格や変遷を具体化しなければならない。

最後に古墳時代の建物とともに検出された中世の掘立柱建物は、現代の町割に近いものとなってくる。断片的な資料ではあるが、古代・中世・現代と繋がる地域の開発状況を知ることができるようにある。



fig. 250 調査区平面図

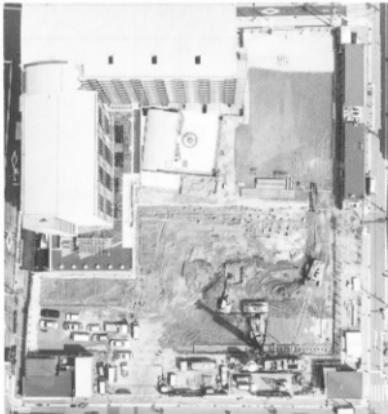


fig. 251 調査地遠景



## ふたばちょう 42. 二葉町遺跡 第7次-2・3・4調査

## 1. はじめに

二葉町遺跡は、六甲山系から流れだした妙法寺川や茹藻川などの河川によって形成された、扇状地の末端部分に立地している。調査地は、現在の海岸線から約500m内陸に入った、標高3~4m前後に位置している。これまでの調査では、縄文時代晩期末の遺物を含む粗砂層と平安時代末から室町時代にかけての集落址が発見されている。

この二葉町遺跡は、昭和63年の第1次調査から今回で第7次調査となる。



fig. 252

調査地位置図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

前年度調査（7次-1）に引き続き、南西部を7次-2として発掘調査を開始した。

**7次-2 検出遺構** 検出された遺構は、溝状遺構6条・土坑8基・ピット50基足らず・落ち込み状遺構4基である。調査区南西部で2×2間の掘立柱建物が2棟存在する。

比較的の遺構が希薄になっている地区である。

**7次-3 検出遺構** 検出された遺構は、掘立柱建物が12棟、井戸13基、土坑1基、大型不明土坑1基、墓2基、溝、ピット多数、不明遺構2基、近世井戸1基を検出した。

掘立柱建物の間数、規模、柱間、についての、右表のとおりである。

**掘立柱建物** それぞれの建物の主軸は、SB03

だけが南北棟で、その他は東西棟で

遺構名	間数	規模	柱間
SB01	4間×4間	8.5m×10m	2.3m
SB02	3間×3間	5.5m×8m	2.1m
SB03	2間×2間以上	4.5m×4.5m以上	2.3m
SB04	3間×4間	6.2m×8.2m	2.0m
SB05	2間×2間	4.5m×4.0m	2.0m
SB06	2間×3間	5m×7m	2.0m
SB07	2間×3間	5m×7.5m	2.5m
SB08	2間×3間	4.7m×8m	2.1m
SB09	2間×2間以上	4.8m×4.0m以上	2.0m
SB10	2間×3間	6.0m×8.4m	2.8m
SB11	3間×3間	5.4m×5.4m	2.0m
SB12	2間×3間	3.6m×7.6m	2.0m

検出掘立柱建物一覧表

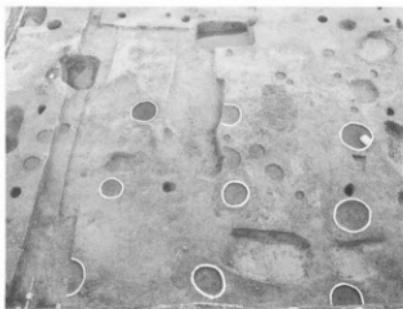


fig. 253 S B09



fig. 254 S E01

あるが S B10だけが、主軸を西に振っている。建物の時期は不明であるが、12世紀後半から13世紀前半にかけての建物群と思われる。

#### 井戸

井戸の掘形規模、深さ、井戸側構造、水溜め構造は、下表のとおりである。

#### S E01

うち、S E01については、船材が井戸側として転用されていた。この船材は、丸木をくり抜き、端部を受け口状に加工し、鉄釘が打ち込んでいることから、「複材刳船」の胴部を利用したものである。使用されている木材は、楠の大木で、木目や節の多さから、根に近い部分を使用しており、船尾端部がより根に近いと思われる。

遺構名	掘方規模	掘形	深さ	井戸側構造	水溜め構造	時期
S E01	3.0m	円形	3.3m	船材転用	曲物二段重ね	13世紀初
S E02	1.9m	円形	1.9m	不明	曲物	13世紀初
S E03	1.6m	円形	1.1m	素掘り	不明	12世紀後
S E04	2.1m	円形	1.5m	不明	曲物据え付け痕	12世紀後
S E05	2.9m	円形	2.5m	不明	曲物	12世紀初
S E06	1.1m	円形	1.1m	素掘り	なし	12世紀後
S E07	2.9m	円形	2.4m	縦板組隅柱横棟型	曲物二段重ね	12世紀後
S E09	1.0m	円形	0.9m	素掘り	なし	12世紀後
S E10	2.3m	方形	3.0m	縦板組隅柱横棟型	丸太くり抜き	13世紀初
S E12	1.1m	円形	1.0m	素掘り	なし	12世紀初
S E13	1.1m	円形	1.1m	素掘り	曲物据え付け痕	12世紀後
S E14	1.8m	円形	1.9m	不明	丸太くり抜き	8世紀中
S E15	1.6m	円形	1.1m	素掘り	なし	12世紀初

検出井戸一覧表

#### 中世墓

墓は、2基検出された。S T01は掘形幅80cm、長さ1.7mで木棺の規模は、幅60cm長さ1.6mの東西方向の長方形である。また、墓の周辺には直径15cmの小さなピット4個を検出した。位置関係から墓の周りに何かを建てたか、覆屋などが存在した可能性がある。

#### S T02

S T02は、掘形幅70cm、長さ1.6mで木棺の規模は、幅50cm、長さ1.4mの南北方向の長方形である。深さは、60cmで良好な保存状態であった。S T01・02とも出土遺物から12世紀末～13世紀初め頃に埋葬されたものである。

不明遺構 遺構の明確な用途などが不明であり、特徴的な形状をしたものを報告する。

S X02 S X02は、今回の調査対象地区の南西隅で検出され、西半部が調査区外に出ているために平面的な規模や形は不明である。南北径約9mで東西径6m以上の規模で平面のプラン



fig. 255 S T02



fig. 256 S X02

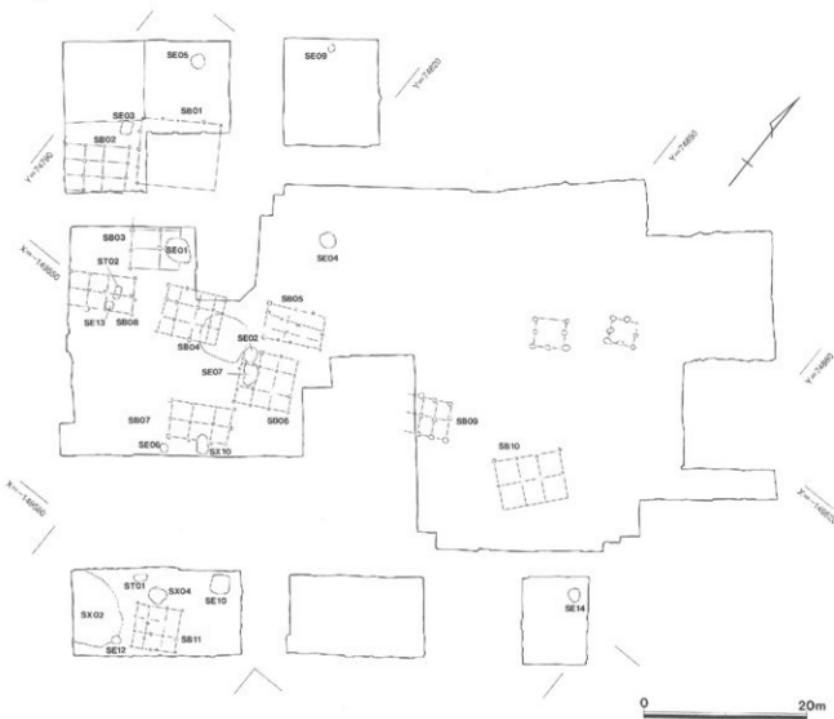


fig. 257 調査区平面図

観察から円形になると思われる。全体に急な傾斜をもって落ち込み遺構面からは、約2.7m掘り下げられている。底部には一辺1.8mの方形に囲まれた木組みが設けられていた。また、この遺構の南東隅の斜面が若干緩やかになっており、そこに杭と横木を用いて階段状に三段の設置しており生活面から底部の木組みの所まで行き来できる。全体の構造から、水溜め状の遺構と思われる。

S X04 S X04は、直径2.3m、深さ0.7mの規模をもつ不明土坑である。平面形状から当初、井戸を想定していたが、深さが浅いため井戸としての利用は考えにくい。堆積過程において中層に炭層があり、9個の石がその面で並べられたように検出された。焼土は検出されなかった。出土遺物は、小片が極少量出土した。

S X10 S X10は、長径2.2m以上、短径2.0mの長楕円形をしており、深さ1.4mである。西肩では、段差20cm、幅70cmと30cmの2段の階段状の段が検出されている。深さが深いことから、水溜め状の遺構もしくはトイレ状遺構を連想させるが、いずれにも関連するような遺物は出土しなかった。

3. まとめ 今回の調査では、平安時代末（12世紀末）から鎌倉時代初め（13世紀初）の中世初期の集落をまとめた範囲で調査することができた。特に、井戸が集中する西半地区に掘立柱建物も集中し、水利（地下水）条件の良い場所に固まって生活していたことが伺える。

中世の文書『山桙記』には、平清盛が安岐宮嶋巖神社へ参拝する途中に駒ヶ林神社と思われる神社名のある津に立ち寄った記録がある。当時、神社を中心とした漁村の存在が今回の調査の結果からも推察することができる。

大型不明土坑については、3次調査や松野遺跡、戎町遺跡などの周辺遺跡から複数同時期のものが発見されていたが、S X02の構造上から溜井としての利用が考えられる。



fig. 258  
調査地遠景

## わかまつちょう 43. 若松町遺跡 第1次調査

## 1. はじめに

若松町遺跡は、以前は周知されていなかった遺跡である。当地において震災復興に伴う共同ビル建設の計画があり、平成9年度に確認調査を実施したところ、埋蔵文化財の包蔵が確認された。このため、今回全面調査を実施することとなった。

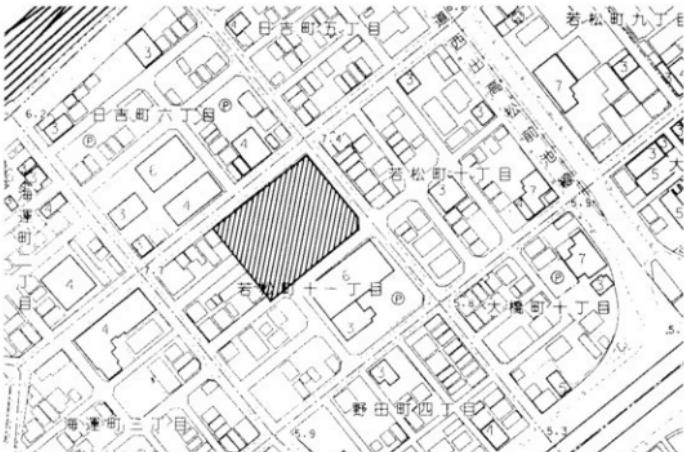


fig. 259  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

第1造構面から第4造構面の4面にわたって調査をおこなった。以下、各造構検出面ごとに報告する。

## 第1造構面

柱穴・溝・土坑・畠跡を検出した。

## 柱穴

柱穴は、1穴のみである。調査区の東半部で検出した。出土土器から判断して6世紀中頃と考えられる。

## 溝

溝は、畠に伴う畠溝を除いては、SD36・SD08など数条の溝を検出した。SD36は北西-南東方向に直線的にのびる溝である。出土土器から判断して平安時代後期と考えられる。SD08は、畠溝を切り、南西-北東方向に直線的にのび北側ではほぼ直角に屈曲する溝である。出土土器から判断して奈良時代と考えられる。

## 土坑

土坑は、調査区の東半部で数基検出した。平面形が不定形で、比較的浅いことから、遺構というより自然の凹地の可能性が高い。出土した土器から、平安時代と考えられる。

## 畠

畠は、5単位（畠1～畠5）検出した。畠1・畠4を除く畠の畠溝底部は鋤（スコップ）による掘削痕が顕著に残っていた。

畠の時期であるが、出土土器から判断して、畠1～畠4は弥生時代後期後半、畠5は6世紀中頃と考えられる。

## 第2造構面

第1面の基盤となった洪水層を掘り下げる検出した面である。水田面の可能性が高いことから調査したのであるが、畦畔等は検出できなかった。この面を検出するにあたって出

土した土器から、弥生時代後期と考えられる。

なお、この面を検出できたのは東半部に限られ、西半部については河道となっており、厚い洪水砂の堆積が認められた。西半部は、当初から河道であったのではなく、この洪水砂によって水田土壤層が抉り取られていた。

**第3遺構面** 第2面の基盤となった土壤層を掘り下げた段階で検出した面である。洪水砂を基盤とし、掘立柱建物と溝を検出した。なお、当遺構面についても、第2面と同様、洪水砂により西半部は抉り取られていた。

**掘立柱建物** 掘立柱建物は、1間×2間の規模からなり、梁行方向で2m、桁行方向で2.2mを測る。柱痕等は検出できなかった。

**溝** 溝については、2条検出した。SD40は、鍵形に直線的にのびる溝である。この溝に囲まれた内側で柱穴を数穴検出している。よって、何らかの施設を区画する遺構ではないかと考えられる。この他、SD40と北西-南東方向に並行する溝も検出されている。

これらの遺構の時期については、当面を検出するにあたって出土した土器から判断して弥生時代後期と考えられる。

**第4遺構面** 第3面の基盤となった洪水砂を掘り下げて検出した面である。第2面同様、水田面の可能性が考えられ調査したのであるが、畦畔等は検出できなかった。当遺構面についても、第2面同様、洪水砂により西半部は抉り取られていた。

当面を覆う洪水砂から出土した土器から、弥生時代後期と考えられる。

**3. まとめ** 今回の調査で検出した頗著な遺構は、第1面で検出した畠に限られる。ただし、妙法寺川による洪水を幾度となく受けており、数度にわたる地形環境の変化およびこの変化に対応した土地利用の変遷が認められる。

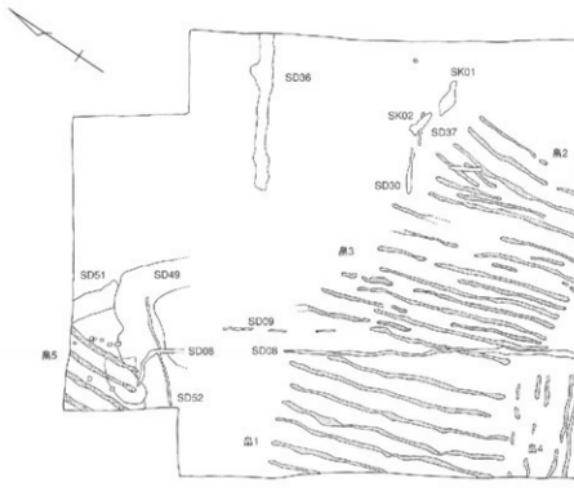


fig. 260  
第1遺構面平面図

## 若松町遺跡（第1次調査）畠遺構の土壤微細形態について

京都大学人間・環境学研究科（日本学術振興会） 宮路淳子  
国立科学博物館筑波実験植物園 平山良治

### 1. はじめに

若松町遺跡は、兵庫県神戸市長田区に所在する弥生時代から平安時代にかけての遺跡である。六甲山麓の南側斜面からひろがる冲積平野に立地する。今回の調査は、阪神・淡路大震災の復興にともなう共同ビルの建設に先立ち行われた。

畠遺構は、数条の平行する溝からなる（図1）。歎そのものは後世の搅乱によって削られている。4単位の畠（畠1～4）。各畠の規模は、畠1：歎の幅は約1.40m、6歎からなる。最も長い歎の長さは19m、面積は約190m<sup>2</sup>、畠2：歎の幅は約1.20～1.40m、10歎からなる。最も長い歎の長さは19m、面積は約300m<sup>2</sup>、畠3：歎の幅は約1.40m、7歎からなる。最も長い歎の長さは19mで、面積は約220m<sup>2</sup>、畠4：5条の歎溝があり、3歎を確認。

各溝の幅は約30cmで、深さは畠1・畠2で20～30cm、畠3・畠4で10cmある。溝の底には耕起痕が残る。土壤微細形態の分析用試料1・2・3は、畠1の東から2列目溝および歎部断面から採取した（図2）。

### 2. 分析の方法

土壤微細形態学用の試料は、創始者の名をとてクビエナ・ボックスと呼ぶ6×8×20cmのステンレス製の金枠を土層断面に打ち込んで、土壤の構造を損なわないように採取する。採取した土壤サンプルは枠のまま液体窒素を用いて予備凍結させた後、真空凍結乾燥機を用いて水分を除去する。その後、真空含浸装置を用いて、ポリエステル樹脂（ポリライトT-241）とメチルエチルケトンバーオキサイドとの混合液を1週間～10日間かけて含浸させる。その後、約3ヶ月かけて徐々に硬化させる。硬化後は工業用大型研削盤によって片面を切断、研削した後、二液混合型のエポキシ樹脂を用いてスライドガラス（10×23cm）に接着する。その後、再び研削盤によってダイヤモンド切断刃によりもう一面を約500ミクロンの厚さで均一に切断し、G C砥石で徐々に研磨を繰り返しながら、約30ミクロンの光を透過させる厚さに仕上げて顕微鏡観察を行う。

### 3. 薄片の観察

完成した土壤薄片は、土層断面図と比較しながら肉眼で観察した後、低倍率の実体顕微鏡を用いて落斜光、透過光を併用しながら観察を行い、必要に応じて岩石顕微鏡を用いる。さらに顕微鏡下で観察した画像を、コンピューターに取り込み、画像解析を行う。

#### 試料1

##### （写真1）

土壤母材は、中度の小粒状の褐色～茶褐色の極細砂～細砂から構成され、粒径はよくそろっている。角柱状の鉱物を多量に含む。

上部は土壤粒子が大きく、粗砂も含み黒褐色の塊状の集積がみられる。黒褐色の塊状粒子は、河川堆積物であると考えられる。

中部では、土壤粒子の大きさは1mm以下～5mm、不整形で、いずれも不均質である。鉱物には本来の形状をとどめないものが多く、人為による搅乱を受けていることがわかる。

植物の纖維片のような物質を多量に含む（写真4）。植物種子かと考えられる炭化物を含む（写真5）。

下半部も、中度の小粒状の褐色～茶褐色の粗砂から構成されているが、上部より粒子が細かい。孔隙はまったく見られない。黄褐色の斑紋が広がる。透過白色光、透過光、石英、斜長石、角閃石などを多く含む。

#### 試料2 (写真2)

土壤母材は、中度の小粒状の褐色～茶褐色の極細砂～細砂から構成され、粒径はよくそろっている。透明で角柱状の鉱物を多量に含む。

上半部は土壤粒子が大きく、粗砂も含み黒褐色の塊状の集積がみられる。黒褐色の塊状粒子は、土壤粒子の大きさは1mm以下～5mm、不整形で、いずれも不均質である。鉱物には本来の形状をとどめないものが多い。

薄片の下部も、中度の小粒状の褐色～茶褐色の極細砂から構成されているが、上半部よりさらに粒子が細かい。孔隙はまったく見られない。黄褐色の斑紋が広がる。植物の纖維片のような物質を含む。

#### 試料3 (写真3)

土壤母材は、中度の小粒状の褐色～茶褐色の極細砂～細砂から構成され、粒径はよくそろっている。角柱状の鉱物を多量に含む。

上半部は土壤粒子が大きく、粗砂も含み黒褐色の塊状の集積がみられる。黒褐色の塊状粒子は、土壤粒子の大きさは1mm以下～5mm、不整形で、いずれも不均質である。鉱物には本来の形状をとどめないものが多く、人為による搅乱を受けていることがわかる。

薄片の下部も、中度の小粒状の褐色～茶褐色の極細砂から構成されているが、上半部より粒子が細かい。小動物によるチャンネル孔隙が2、3見られる。黄褐色の斑紋が広がる。

#### 4. 考察

今回の分析試料1は、堆積状況から、畠溝に残存した耕作土の可能性のある土壤である。顯著な团粒構造の発達は認められないものの、多量の植物纖維片を含むこと、ガラス質の鉱物が細かくまんべんなく破碎されていることなどから、耕作土の特徴を示している可能性は高いと考えられる。2・3については、耕作土の特徴を示す微細形態はみられなかった。今後畠作地の耕作土の試料を増やし、比較検討を重ねていきたい。

#### 参考文献

- Marie A Courty, Paul Goldberg and Richard Macphail. 1989 "Soils and Micromorphology in Archaeology", Cambridge University Press.
- 松井 章、平山良治、宮路淳子、リチャード・マックフェイル、1996a、「考古学における土壤微細形態学の有効性(予報)」『1996年度日本考古学協会総会発表要旨』、日本考古学協会、pp. 149-152
- 松井 章、平山良治、宮路淳子、リチャード・マックフェイル、1996b、「黄石および水田土壤の土壤微細形態学的研究』『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集』、日本文化財科学会、pp. 58-59
- 宮路淳子、松井 章、平山良治、2000a、「野木遺跡軟状遺構の土壤微細形態について」『野木遺跡Ⅲ』青森県教育委員会、pp. 91-94
- 宮路淳子、松井 章、平山良治、2000b、「砂子遺跡第24号縦穴住居跡床面の土壤微細形態について」『砂子遺跡』青森県教育委員会、pp. 318-319

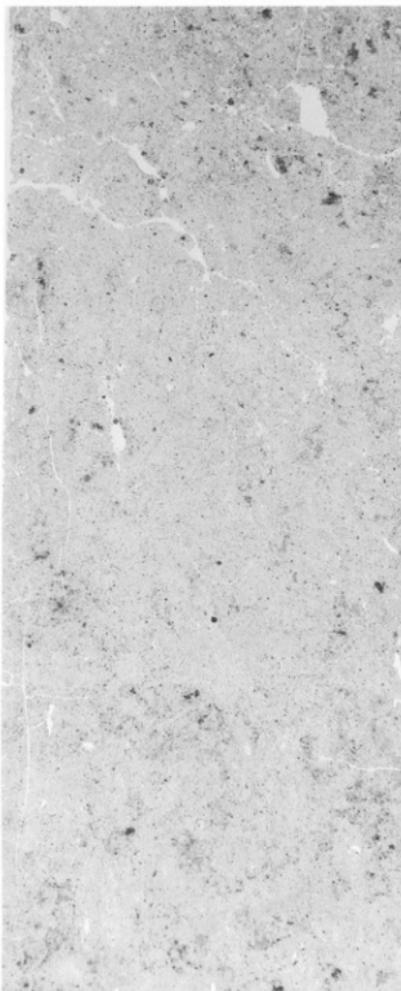


fig. 261 写真 1

写真 1 薄片中部付近に含まれる鉱物には本来の形状をとどめないものが多く、人為による搅乱を受けていることが考えられる。

写真 2 小粒状の褐色～茶褐色の極細砂～細砂から構成され、粒径はよくそろっている。透明で角柱状の鉱物を多量に含む。

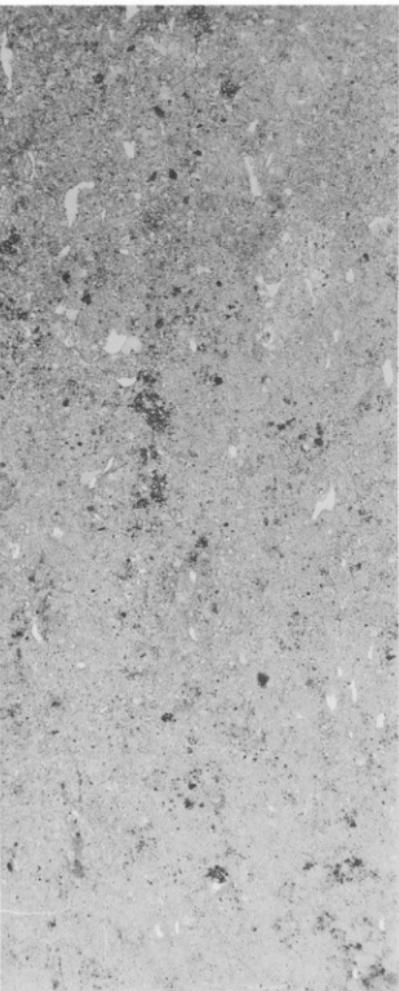


fig. 262 写真 2

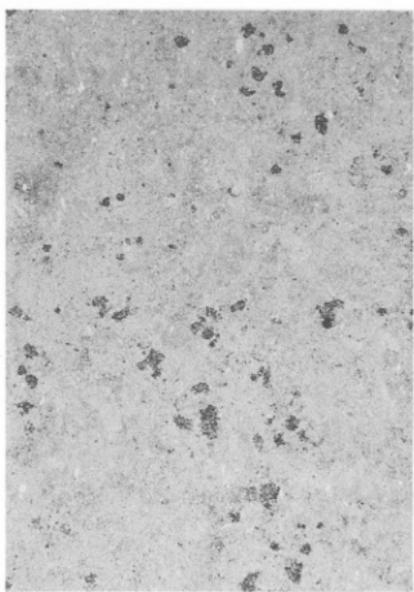


fig. 263 写真 3

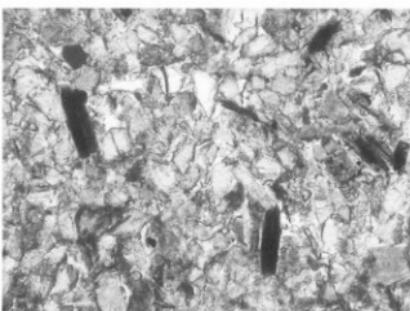


fig. 264 写真 4

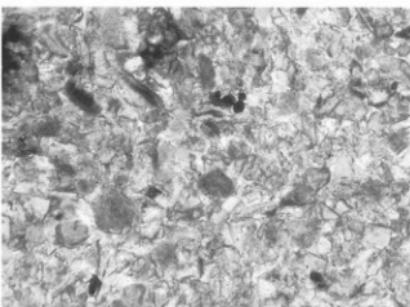


fig. 265 写真 5

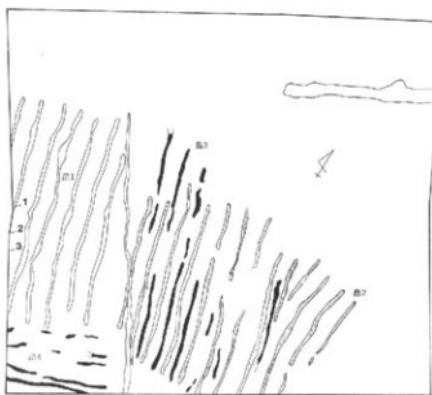


fig. 266 試料採取地点

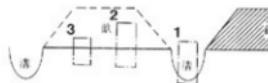


fig. 267 試料採取断面模式図

## わかまつちょう 44. 若松町遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

若松町遺跡は、震災後に新たに発見された遺跡である。当遺跡は、四周を北から時計回りに大田町遺跡・戎町遺跡・千歳町遺跡・東に松野遺跡・二葉町遺跡・南に長田野田遺跡・長田本庄町遺跡、西に鷹取町遺跡と遺跡で取り囲まれている。当該地にも遺跡の存在の可能性が予測されたが、これまで大きな開発が及ばず遺跡の存在が確認されていなかった。

若松町遺跡は、六甲山系から流れだした妙法寺川や茹藻川などの河川によって形成された、複合扇状地上に立地している。調査地は、現在の海岸線から約900m内陸の標高7m前後の地点である。



fig. 268  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

#### 第1遺構面

検出された遺構面は、調査区全面では2面で、II・IV区のみ第3遺構面まで検出された。検出された主な遺構は、鎌倉時代の木棺墓2基・掘立柱建物4棟・溝状遺構・井戸状遺構やピット、古墳時代前期（布留併行期）竪穴住居1棟・スキ溝痕跡などである。

#### S T101

S T101はI区南西部で検出された、木棺墓である。

棺内北から歯が2個出土した。大臼歯1個と小臼歯1個である。咬耗の状態より壮年から熟年と考えられるが、性別については不明である。刀子1口が出土したほか土師器壺1個・土師器壺3個・土師器小皿11個が出土した。

また棺底板下より、頭位置から足元にかけてやや東よりに土師器小皿5個が出土した。出土状況から棺桶を埋置する前の祭祀があったと考えられる。

さらに掘形の南端中央に直径0.1mのピットが検出された。絵巻物にみられる葬送に用いる指し物を立てた痕跡の可能性も考えられる。S T101の時期は、出土遺物より12世紀中葉から後半頃と考えられる。

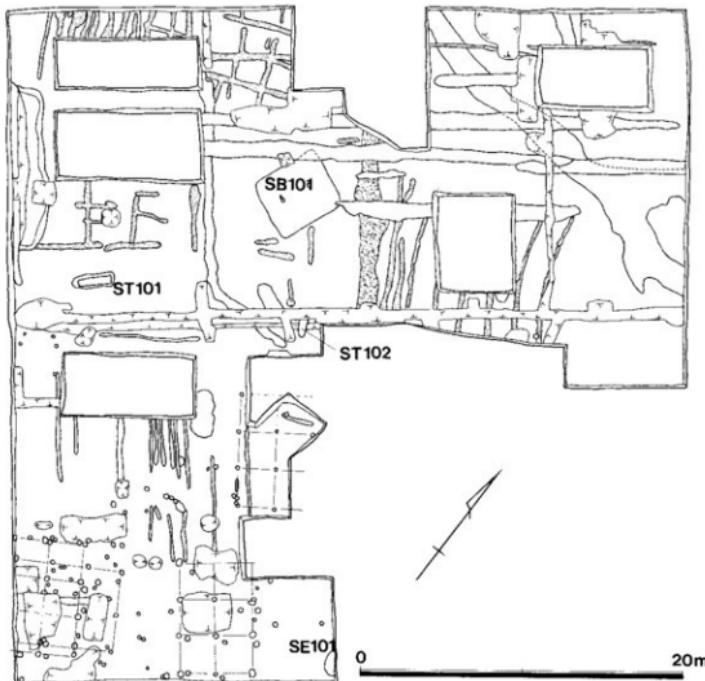


fig. 269  
第1遺構面平面図

**S T102** S T102はIV区北東部で検出された、木棺墓である。北半は後世の掘削により不明である。棺材は底板と考えられる板材が検出された。残存状況は悪い。出土遺物は須恵器椀のみである。

**S B101** S B101は、I区東で検出された竪穴住居である。東西辺3.6m・南北辺4.1mのやや南北に長い方形で南辺以外には周壁溝をもつ。支柱穴は2カ所で共に深くしっかりしたものである。北西隅では、炭化材が2カ所検出された。垂木の一部と思われる。住居址の掘削中も炭片が多く検出され、焼失したものと考えられるが、床面などは焼けてはいなかった。遺物より古墳時代前期（布留併行期）のものと考えられる。

**第2遺構面** 検出された主な遺構は、竪穴住居4棟・溝状遺構などである。

**S B201** S B201は、I区で検出された竪穴住居である。一辺6.0mの方形で周囲にベッド状遺構をもち、ベッド上には周壁溝がある。ベッドは盛土で成形されており、盛土下で周壁溝が存在した。東辺のベッド上に土坑が掘られる。床面にはいびつな形状であるが炉と考えられる土坑がある。ベッド西隅では炭化材が検出された。住居址内の堆積土にも多くの炭化

物が混入しており、SB201と同様焼失したものと考えられる。住居址の時期は、出土遺物より古墳時代前期（庄内併行期）と考えられる。

**SB202** SB202は、南北辺4.9m東西辺4.1mの方形の竪穴住居である。南西部は調査区域外である。北辺・東辺南辺に周壁溝があり、住居址中央に土坑がある。ピットは4基検出され、住居址の三隅のピットが支柱穴と考えられる。時期はSB201・SB203と同様の時期と考えられる。



fig. 270  
第2遺構面全景

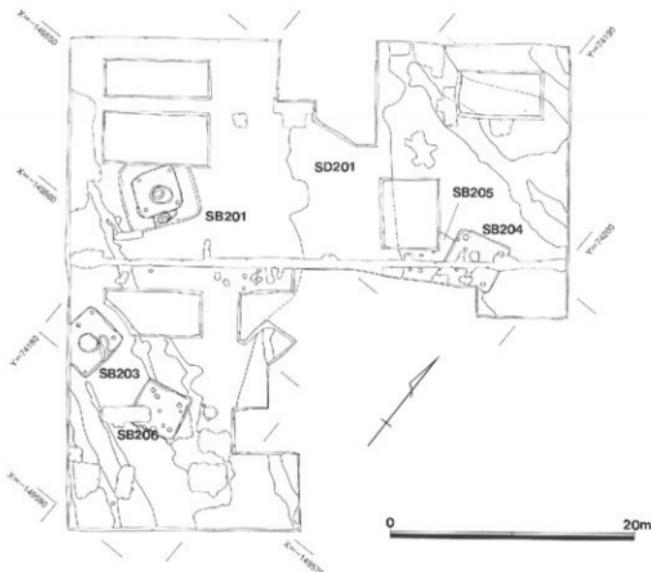


fig. 271  
第2遺構面平面図

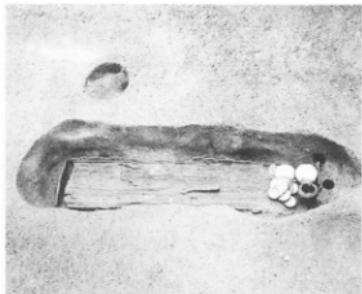


fig. 272 ST 101

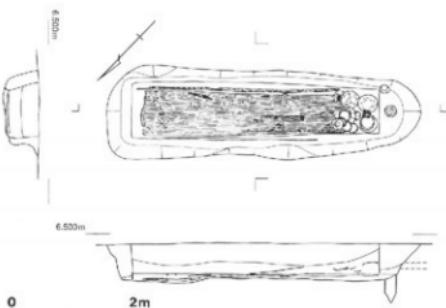


fig. 273 ST 101平面図・断面図

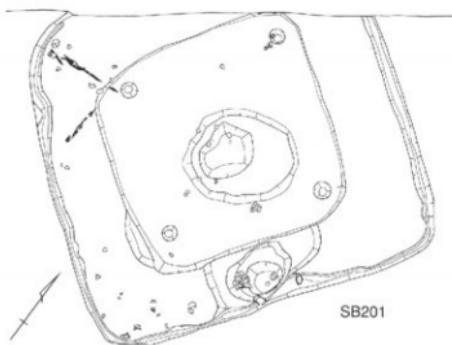


fig. 274 SB 201・203平面図



えられる。

**SB 203** SB 203は南北辺3.9m東西辺4.1mの方形の竪穴住居である。四辺に周壁溝をもつ。またこの住居址も焼失したものと考えられ、多くの炭化材が検出された。床面からピットが8基検出され、三隅のピットが支柱穴と考えられる。出土遺物から住居址の時期は、多少の前後はあるもののSB 201・SB 202と同様の時期と考えられる。

**SB 204** SB 204はⅢ区の南端部で検出された一辺4.6mの方形の竪穴住居である。後世の搅乱を受け不明な部分が多いが、支柱穴が4カ所で中央に土坑を持つ住居址と推定される。

出土遺物からSB 201・SB 202などと同様の時期と考えられる。

**SD 201** SD 201は、I区とⅢ区にまたがって検出された南北に流れる溝状遺構である。幅約7m・深さ0.2~0.3mの規模である。遺物より弥生時代後期頃と考えられる。

**第3遺構面** 検出された遺構は、溝状遺構とピットのみであった。

この第3遺構面の時期は、遺構面を覆う黄色砂泥から微量の土器しか出土せず、時期を決定づけるものはない。層位より弥生時代後期より古い遺構面といふにとどめる。

3. まとめ 遺構面は3面存在し、検出された遺構は中世の掘立柱建物・木棺墓や古墳時代の堅穴住居・溝状遺構などである。北の第1次調査の遺跡の有り様と非常に異なる状況であった。また、遺跡の範囲はさらに南にひろがるものと思われる。

第1次調査から連なるスキ溝痕遺構の評価は、今後類例の調査を行い今後検討したい。さらに当調査で明らかとなった中世の集落・古墳時代の集落は、周辺の遺跡との関連を十分に考慮し今後検討しなければならない。

今後の検討課題が多く目立つが、これまでわからなかった遺跡が発見されたことは大きな意義を持つであろう。

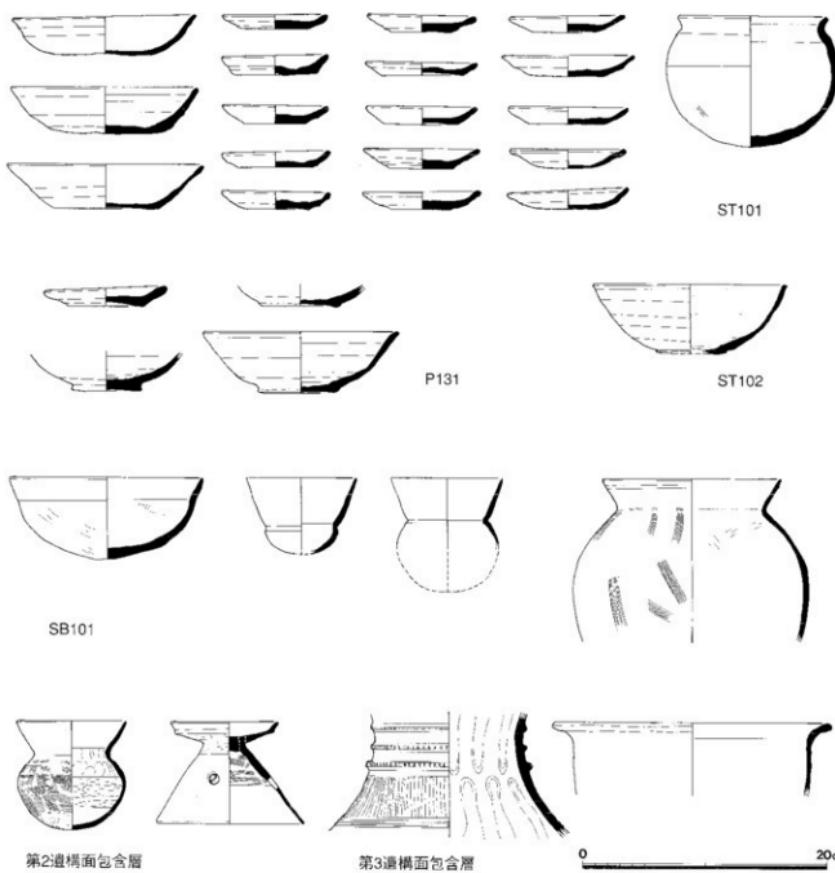


fig. 275 出土遺物実測図

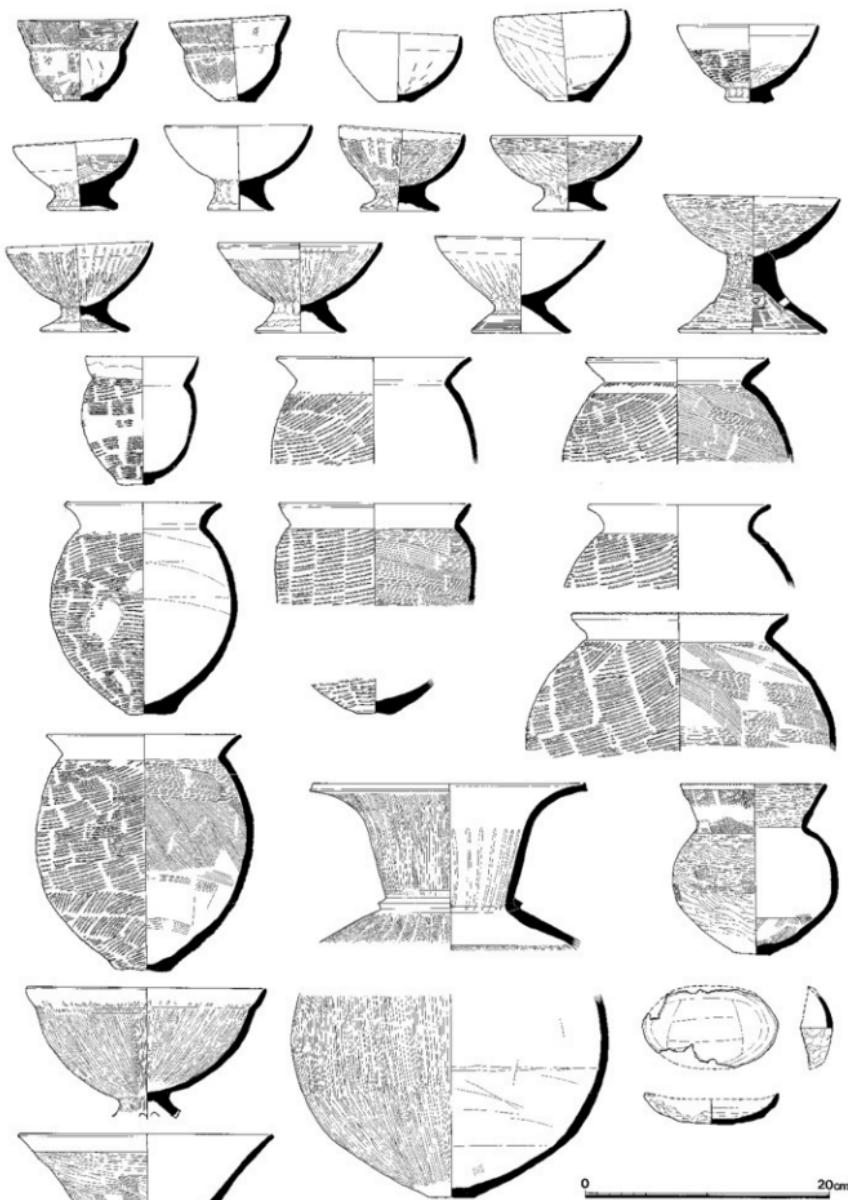


fig. 276 出土遺物実測図 2

SB203

0 20cm

## えびすちょう 45. 戂町遺跡 第27次調査

### 1. はじめに

戎町遺跡は、山陽電鉄板宿駅の南北に広がると推定され、妙法寺川左岸の扇状地末端の微高地に立地する遺跡である。

これまでの調査で、縄文時代晚期から古墳時代前期および中世の複合遺跡であることが判明してきている。なかでも、弥生時代～庄内期の遺構・遺物が多く確認され、西摂津の最西端に位置する弥生時代の拠点集落と考えられる。

今回の調査は、戎町2丁目に位置し、第5次調査地の東にあたる。共同住宅建設に伴う復興調査で、工事影響範囲部分である地表下1.1mまで調査を実施した。



### 2. 調査の概要

#### 基本層序

調査区の基本層序は、盛土下に旧耕土が存在し、いく層かに分層が可能な砂を主体とする層が存在する。その下に遺物を含む旧耕土と床土が存在し、床土下面が第1遺構面となる。北半部分では、この床土が存在せず、旧耕土直下で遺構面となる。

第1遺構面は、古墳時代前期および鎌倉時代前期の遺構面が同一面で確認された。

**S D01** 調査区の北端に位置し、北東から南西にはしる、幅2.1m、深さ50cmを測る2段掘りの溝である。出土遺物から古墳時代前期のものとみられる。

**S K01** 調査区の中央に位置する、直径2.3cm、深さ50cmを測る土坑である。埋土がS D01と一致しており、同時期と考えられる。

**S K04** 調査区の中央に位置する、直径2.2cm、深さ32cmを測る土坑である。埋土がS D01と一致しており、同時期と考えられる。

**S K05** 調査区の中央に位置する、直径3.4cm、深さ64cmを測る土坑である。埋土がS D01と一致しており、同時期と考えられる。

S B01 調査区の北において確認した住居址状の落ち込みである。一辺3.4mを測る方形のものである。周壁溝は確認されなかった。中央部分に2本の柱痕跡が確認されており、2本柱の住居址と考えられる。なお、この住居址から土師器が床面から浮いた状態で出土している。これらの土器は、すべて布留期に属するものであり、これにより廃絶時期が求められるものである。

3. ま と め 今回の調査では、布留期の住居址等を検出した。工事影響深度の関係から下層については確認調査のみとなつたが、弥生時代IV様式併行期の水田層や、弥生前期の遺構が下層に存在していることも確認された。

弥生時代に關していえば、今回の調査地は、これまでで最も東に位置する部分であり、当調査地の周辺では、さらに東側でも良好に遺構が残されている可能性が高いことを示す資料と言えよう。



fig. 278 S B01

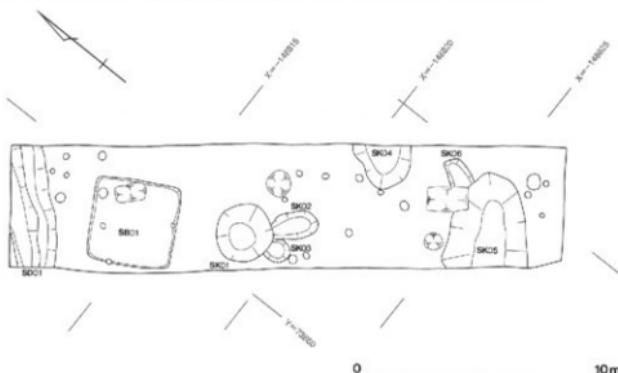


fig. 279  
調査区平面図

## ちとせ 46. 千歳遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

千歳遺跡は妙法寺川が形成した扇状地末端部に立地する遺跡である。平成8年度に市営住宅の建設に先立つ試掘調査で発見された新しい遺跡で、市営住宅建設を含め、過去2回の調査が実施されている。第1次調査では弥生時代中期の土器棺が、土地区画整理に伴う第2次調査では弥生時代の水田の可能性のある遺構面と自然流路が確認されている。今回の第3次調査地点は先の両調査地点の西隣に位置し、微地形の観察と両調査の成果から判断して遺跡の主要部になる可能性が考えられている場所である。

今回の調査は、店舗付き共同住宅建設に伴うものである。



fig. 280  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査は平成9年度中に西側約3分の1（西区と呼称）が終了し、引き続き東側約3分の2（東区と呼称）の調査を実施した。なお、西区の調査については、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班の高瀬一嘉・深江英憲両氏の支援を受けた。

#### 西 区

第1遺構面は、5世紀後半～6世紀前半にかけてのもの、第2遺構面は弥生時代後期末～古墳時代初頭のもの、第3遺構面は弥生時代中期～弥生時代後期のものである。

以下に各遺構面ごとに、その概要を述べる。

#### 第1遺構面

溝3条と井戸を検出した。埋土内から出土した土器から時期は5世紀末～6世紀前半にかけての遺構面であると考えられる。

#### S D01

3条の溝のうち中央のものをS D01とした。溝は北から南方向に流れしており、調査区の中央部で2本に分岐している。溝の幅は35～60cm、深さ8～15cmを測る。当遺構は調査区南部で自然の落ちに流れ込んでいる。北部埋土内より5世紀末～6世紀中頃の須恵器が一

括して出土している。

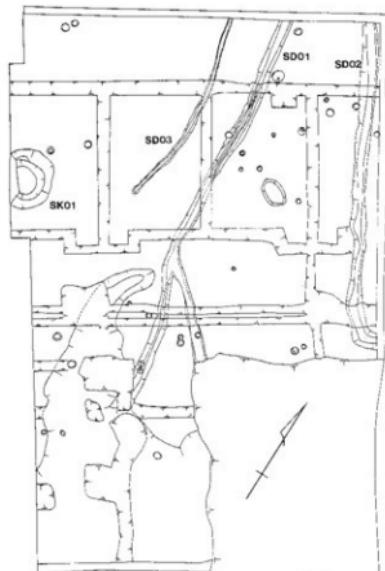
S D02 調査区の東端で検出したものである。調査区とほぼ並行して検出され、南端でほぼ直角に東方向に向きを変えている。溝の幅は40~70cm、深さ10~15cmを測る。埋土内から弥生土器・古墳時代の須恵器等が若干出土しているが、遺構の時期・性格は明らかではない。

S D03 S D01の西側で、並行して検出されたものである。溝の規模は小さく幅20~25cm、深さは最大で10cm程度のものである。調査区内で終息しており、検出した長さは約8mである。

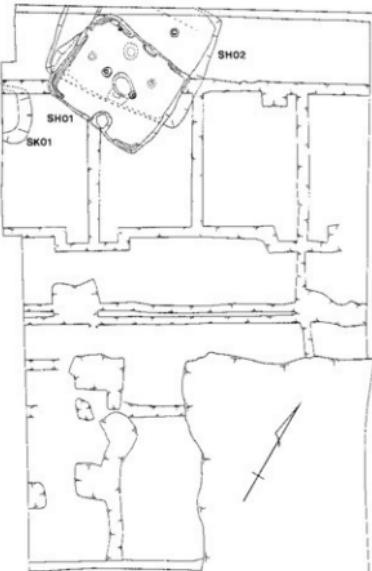
SK01 調査区西端で検出したものである。土坑としているが、調査の結果素掘りの井戸である可能性が高い遺構である。遺構の平面形は南北に長い梢円形状を呈する。規模は長軸方向に2.5m、短軸方向は一部調査区外にあるため、1.7mにとどまるが、推定で2m程度と考えられる。壁面の立ち上がりは段がついており、上方が開いた形状である。深さは90cmを測る。遺構は下層の疊層を貫通しており、疊層からの湧水が非常に多い。このため、井戸としての用途が予想される。埋土内からは、5世紀末~6世紀初頭の須恵器が出土しており、この時期の遺構と考えられる。

第2遺構面 穴住居2軒と土坑1基を検出している。弥生時代後期末~古墳時代初頭の遺構面であると考えられる。

SH01 調査区北西部で検出したものである。SH02と重複して検出され、SH02を切っている。



第1遺構面



第2遺構面

0 5m

fig. 281 西区第1・2遺構面平面図



fig. 282

西区

第1～2遺構面全景

平面形は方形を呈しており、規模は東西長軸方向に5.0m、南北短軸方向に4.1mを測る。屋内施設は南辺の中央部やや南寄りで、壁に接して土坑、さらに床面中央部で焼土坑を検出した。主柱穴は焼土坑を挟んで2本検出した。

出土した遺物は埋土上層から須恵器を含む時期の土器が出土しているが、北西コーナー部床面に接して小型の壺、台石が出土している。遺構の時期は床面から出土している遺物から布留期のものと考えられる。

**S H02** S H01と重複して検出されたものである。S H01に切られているため、これより古い時期の遺構である。遺構は一部調査区外に伸びている。検出した規模は東西長軸方向に6.5m、南北短軸方向に5.0mを測る。屋内施設はベッド状遺構と呼ばれる高床部を検出した。西・北の2方向で確認している。主柱穴は3穴を検出しており、4本柱であることが判明した。土坑はS H01と同様に南壁に接して1基、中央部に焼土坑が1基検出された。高床部は最大部で幅1m、高さ15cmである。西辺のものは地山の削り出し、北辺のものは盛土である。

出土した遺物は、埋土内より壺、甕などの土器が出土しているが、出土位置が押さえられるものでは、西辺高床部上で高杯と縁泥片岩製の石泡丁が出土している。遺構の時期は高床部から出土している遺物から庄内期のものと考えられる。

### 第3遺構面

流路1条を検出している。

**S R01** 検出した流路をS R01と命名している。西側から流れ調査区中央部付近で方向を北側に変えている。幅は4.5～5.5m、深さは50～70cmを測る。遺構は東西の調査区外に伸びている。何度かの埋没を繰り返しているようである。埋土は大別して最下層に暗灰黄色の粗砂混じり中疊、上層に灰オリーブ色のシルト質細砂が堆積している。

出土した遺物は下層の疊層からは弥生時代の中期（II～IV様式）の土器、上層からは弥生時代後期（V様式）の土器が出土している。

遺構の性格は明らかではないが、舌状に伸びる微高地の縁辺に沿って流れていることか

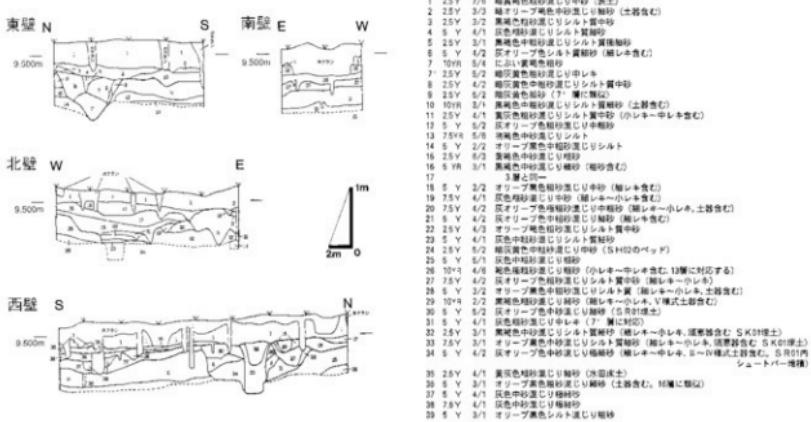


fig. 283 西区調査区断面図

ら、ひとつには微高地上の居住に適した地域と後背湿地とを区画するものであると考えられる。

**東 区** 弥生時代後期から古墳時代後期と考えられる遺構面である。調査区の東側で溝1条、土坑1基、落ち込み2基を検出した他、ピットを約60基検出したが、ピットの大半は調査区の西側に集中していた。

**S D101** 調査区北半の東側で検出した溝で、蛇行しながらほぼ東西方向に延び、両端は共に調査区外へ続いている。長さ11.2m以上、幅30~50cm、深さ10cmで、断面の形状は浅い楕円状である。遺物は弥生土器片が少量出土した。

**S K101** 調査区北半の西端で検出した円形の土坑である。第1遺構面上で検出したが、上層の旧耕作土直下から掘り込まれていたものが残存したもので、耕作に関わる土坑と思われる。直径0.8m、深さ80cmで、断面はU字状である。遺物は中世ころの須恵器片・土師器片が数点出土した。

**S K102** 調査区北半の中央で検出した土坑である。搅乱で全体の約半分が破壊されているが、わずかに検出できた輪郭から平面は長方形と推定できる。推定長4.4m×3.7m、深さ20cmで、底面は平坦である。遺物は弥生土器片が大量に出土した。

**S X101** 調査区北半中央の北西壁の直下で検出した浅い落ち込みで、調査区外に続いている。搅乱で面積の約半分が破壊されているが、推定長5.0m、幅1.4mまで検出し、深さは30cmである。埋土は淡灰茶色シルトで、弥生土器片が出土した。

**S X102** 調査区南半の東角で検出した落ち込みである。確認した範囲では平面は歪んだ隅丸方形状で、一辺3.0m以上×3.0m以上、深さ80cmで、底面は平坦である。

遺構埋土からは弥生土器片が大量に出土した。

**ピット群** 調査区の西側で検出したピット群である。柱痕の明確なもの、根石を持つものなどは存在しなかった。また建物を構成するようにまとまらなかった。

**大溝** 調査区北半の西隅で検出した溝である。西区で検出した大溝の続きのごく一部を検出したのみで、西区で確認した規模を変えるような状況ではない。大溝の北端は調査区外に続いている。弥生土器片が少量出土した。

**第2遺構面** 弥生時代中期中頃と考えられる遺構面で、調査区の東側と西端で自然流路を1条ずつ検出したが、他に遺構は検出できなかった。

**S R201** 調査区北半の東側で検出した自然流路で、ほぼ直線的に東西方向に延び、両端は共に調査区外へ続いている。長さ9.7m以上、幅50~140cm、深さ10cmで、断面の形状は浅い皿状である。埋土は灰褐色砂礫で、底部にはほとんど傾斜がない。遺物は弥生土器片が少量出土した。

**S R202** 調査区北半の西端で検出した自然流路で、北東から南西方向に流れ、北東端は調査区外へ、南西端は西区へ続いている。長さ2.6m以上、幅240cm、深さ40cmで、断面の形状は浅い椀状である。埋土は淡橙褐色砂礫で、遺物は弥生土器片が少量出土した。

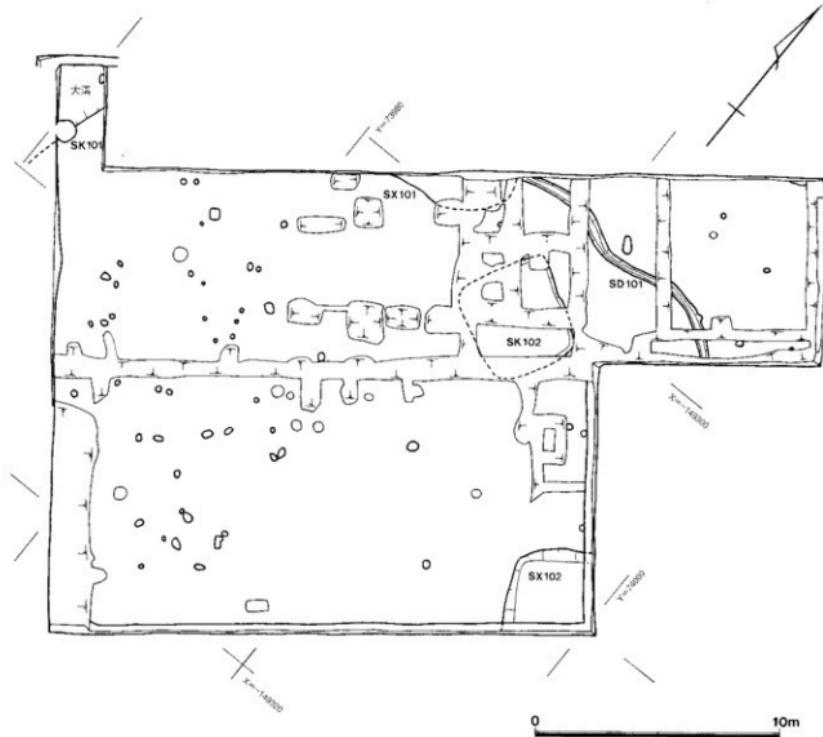


fig. 284 東区第1遺構面平面図



fig. 285 東区第1遺構面全景

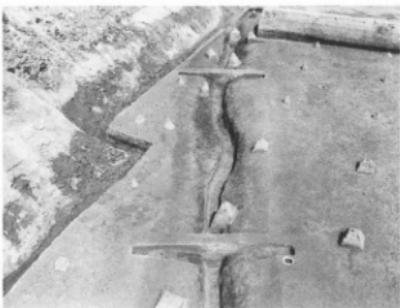


fig. 286 S R301

**第3遺構面** 弥生時代中期前半頃と考えられる遺構面で、調査区の中央で掘立柱建物を1棟、西側で掘立柱建物を1棟、自然流路を1条検出した他、ピットを5基検出した。

**S B301** 調査区北半の中央で検出した不整な掘立柱建物である。柱間は1間×1間で、棟通りの方向は不明である。掘形の深さは40~50cmで、柱痕跡は明瞭であった。

**S R301** 調査区西侧で検出した自然流路である。北西から南東方向に流れ、両端は調査区外へ続いている。流路のほぼ中央には流水の浸食で形成された深まりが緩く蛇行している。長さ23.9m以上、幅250~320cm、深さ60~70cmで、断面の形状は上半は浅い皿状、下半は逆台形である。遺物は弥生土器片が出土した。

**3.まとめ** 今回の調査では弥生時代後期頃の溝・土坑等および弥生時代末から古墳時代初頭の堅穴住居が検出されている。微地形の観察等から事前に遺跡の主要部になる可能性が考えられていたが、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての居住域であることが判明した。しかし当時の遺構面の標高は第1次調査地点から単純に高くなっていくのではなく、東区の中央付近で一旦高くなった後、西区へ向かって逆に低くなっていくことが明らかとなった。したがって居住域の中心部は北隣の保育園の方向であったと想像できる。

弥生時代中期前半の遺構面では自然流路しか検出できなかった。過去の調査においても顕著な遺構は検出されておらず、当時は居住域ではなかった可能性が高い。基盤の土質は黒灰色系のシルトで、水田城であった可能性もある。しかし西区を含め、さらに西方へは遺構は存在しないものと考えられる。

また遺構面を覆う厚さ約50cmの洪堆积層であるが、第1・2次調査地のみならず、北西から西方約300mに位置する戎町遺跡や大田町遺跡でも、この時期の前後と考えられる洪堆积層が確認され、弥生時代中期から後期にかけてのある時、妙法寺川が大規模な洪水を最低一度以上引き起こしていたものと考えられる。

弥生時代中期前半の遺構面では掘立柱建物と自然流路を検出したが、遺構密度はかなり低い。掘立柱建物の柱配置も不整で、柱穴としては確実であるが、実際には建物ではなかった可能性も残る。調査区内は北から南へ緩く傾斜していることから、第1遺構面同様に居住域の中心部は北隣の保育園の方向であったと想像できる。

## 47. 千歳遺跡 第4次調査

### 1. はじめに

平成7年1月17日に起きた阪神・淡路大震災では、神戸市須磨区千歳町一帯は甚大な被害を受けた。千歳遺跡はその復興事業に伴う試掘調査により発見された遺跡である。

千歳遺跡では、これまで3次の発掘調査が実施されており、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。



### 2. 調査の概要

**基本層序** 調査地は北から南にむかって緩く傾斜する緩斜面地で、妙法寺川により形成された扇状地もしくは、扇状地内の微高地上に位置するものと推定されるが、市街地化が著しく、表面上での観察は困難である。

調査地は各所で搅乱を受けていたものの、2層の遺物包含層、3面の遺構面を確認することができた。

基本土層は、数面の旧耕土層の下に微細な土師器片を含む、遺物包含層である黒灰色砂

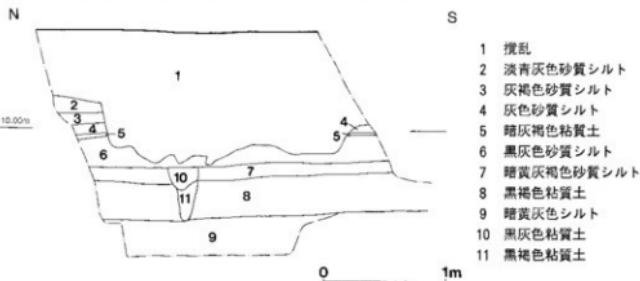


fig. 288  
調査区断面図

質シルトが存在するが、遺物が微細であり時期は不明である。

この下層は第1遺構面を構成する暗黄灰褐色砂質シルトであり、この下の層が弥生時代の遺物を含む、遺物包含層である黒褐色粘質土である。

この上面から水田畦畔が検出されており、第2遺構面を形成している。この下層は暗黄灰色シルトであるが、遺構は確認されなかった。

**第1遺構面** 第1遺構面については、調査区の東側の大半が湿地状を呈しており、西側は微高地上で2条の溝を確認した。

**S D01** 幅35~50cm、検出面から深さ10cm前後の北西から南東へ延びる溝で、北西側はS D02によって、切られている。遺物の出土はなかった。

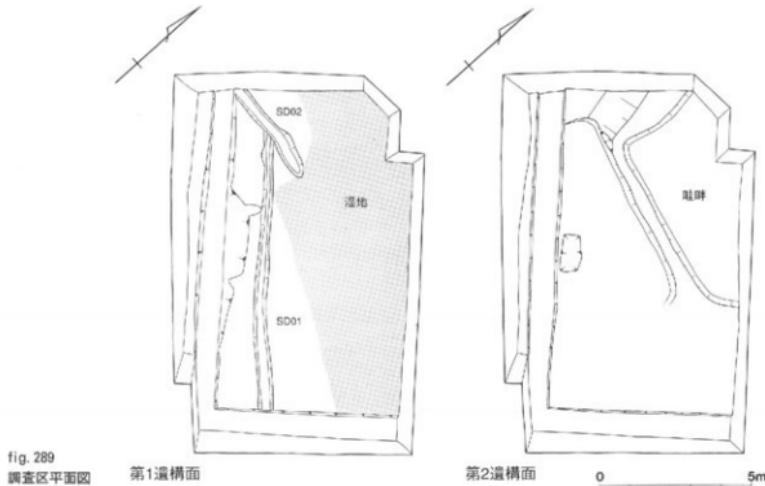
**S D02** 幅40~60cm、検出面から深さ10cm前後の東西方向の溝で、微細な土師器片が数点出土しているが、時期は不明である。

**第2遺構面** ほぼ、南北方向および、これに直交する水田畦畔を1条検出したが、稻株の痕跡などを確認することはできなかった。畦の幅は、約70cm前後である。

**第3遺構面** 遺構を確認することはできなかった。

**3. まとめ** 調査の結果、調査地は西側が微高地であり、東側は湿地状を呈しており、水田として利用されていたことが明らかになった。調査地の西側近隣地で平成9年度に実施された第1次調査では弥生時代の埋甕が出土しており、遺物包含層の遺物の出土状況からみても、西側に遺跡の中心があるものと推定される。

今回の調査では、限られた範囲の調査ではあったが、千歳遺跡において、さらに東側まで遺構が広がることがあきらかとなった。



## おおたちょう 48. 大田町遺跡 第11次調査

### 1. はじめに

大田町遺跡は、妙法寺川左岸域に形成された沖積地内の自然堤防状の微高地に立地する遺跡で、現地表で標高は約13~15mである。これまでの調査において、弥生時代前期~平安時代前期にかけての集落址であることが徐々に判明しつつある。こうした中でも、奈良~平安時代にかけての掘立柱建物が約30棟確認されている点に加え、出土した遺物にも土師器・須恵器だけでなく黒色土器・縁軸陶器や灰軸陶器なども多数あり、「荒田郡」銘の円面鏡もある。このように、古代山陽道に面した「須磨駅家」と推定するに相応しい、官衙的な施設と周辺官人の集落をあわせたような遺跡の内容を示している。

また、弥生時代中期中葉の円形竪穴住居や古墳時代後期の滑石製品が約550点出土した土坑などの遺構も確認されている。

周辺では北側に隣接して立地する弥生時代前期~平安時代後期の集落址として知られる戎町遺跡がある。



fig. 290  
調査地位図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査対象地区は、平成3年度の第2次調査地点の北側、平成6年度の第5次調査地点の西側、平成7年度の第6次調査地点の南側にある。

調査は、建設工事に伴う工事影響深度がおよぶ第1遺構面と、さらに下層で支持杭打設予定部分について実施した。

なお、I区およびIII区西北隅では合計7面の遺構面が確認できたが、その他は第2遺構面の流路によって遺跡の基盤層までもが削平され、第3遺構面以下が遺存していない。

#### 第1遺構面

P111 第1遺構面では、ピット30基、土坑3基、落ち込み3基、溝状遺構1条が確認された。P111は奈良時代と考えられるピットで、60×70cm、深さ50cmの隅丸方形の掘形に直径25cmの柱痕を持つ。

P107・109は平安時代前半期と考えられるピットで、一辺約50cm、深さ55cmの隅丸方形の掘形に直径20cmの柱痕を持つ。両者とも埋土上層が暗灰色シルト質極細砂~細砂で、暗

褐色極細砂混じりシルトの柱痕は残存高25cmである。

なお、調査対象地区西半部では奈良～平安時代と同一遺構面で確認されていたが、東半部では暗褐灰色細砂質シルト上面から掘り込まれた暗褐色シルト質極細砂～細砂の埋土をもつピットが平安時代後期のものである。

P121 東半部のP121・122・125は、その配置から柱間約2mの掘立柱建物の一部を構成するものと考えられる。121では土師器・須恵器・瓦器が、122では円礎3個を重ねた礎盤が確認されている。

S D101 S D101は東西方向に走る最大幅2.5m、深さ約15cmの溝状遺構である。埋土は暗灰褐色系のシルト質極細砂を中心としたもので、鎌倉時代前期の土師器・須恵器・瓦器が出土している。



fig. 291  
第1遺構面  
東部全景

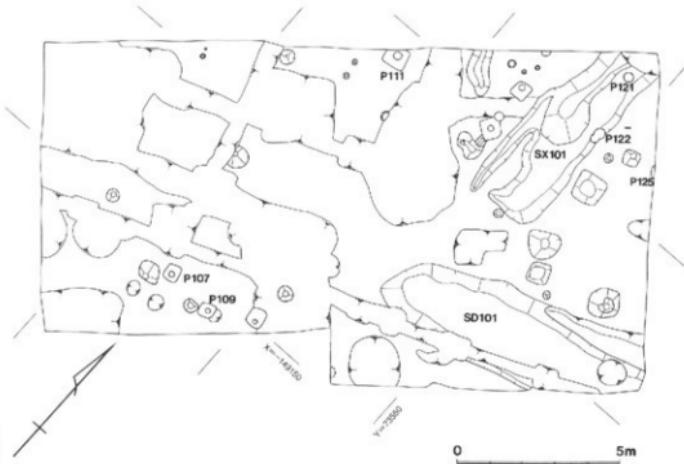


fig. 292  
第1遺構面  
平面図

- 第2遺構面** 第2遺構面（古墳時代後期）では、流路とその西肩部分が確認できた。幅は12m以上、流路 確認できた最大の深さは2.5mである。6世紀代の土師器・須恵器・製塙土器に混じって、若干の突帯文土器・弥生土器・サスカイトなども出土している。なお、中央部において流路肩部に貼り付くようにして約3m角の範囲で直径50cm大の礫が集中して出土している。下流側にこれらの礫群を堰き止めるような何らかの施設が営まれていたと考えられる。
- 第3遺構面** 第3遺構面（弥生時代後期）では落ち込み1基、土坑6基、ピット4基が確認されている。
- 下層遺構面** 下層については、第4遺構面で溝状遺構1条、第6遺構面において溝状遺構1条、落ち込み1基が、また最下層にあたる弥生時代中期の第7遺構面においては、溝状遺構3条が確認された。
- S D601 S D601は緩やかに円弧を描く、幅0.9~1.3m、深さ15cm前後の流路と考えられる。Ⅲ様式の完形の壺が1点、赤塗の木器形高杯環部片1点が出土している。
- S X601 S X601は不整形の落ち込みで、深さ約10cmである。長頸壺が1点押しつぶされた状態で確認されている。
- S D701 S D701は南北方向に走る、幅約1m、深さ約30cmの断面形が鈍いV字形の水路である。埋土上層からⅡ様式の壺の破片が1点確認されている。
- S D702 S D702は緩やかに円弧を描く、幅1.0~1.8m、深さ10cm前後の流路と考えられる。Ⅲ様式の完形の壺が1点出土している。
- S D703 S D703はⅢ区の西北隅で確認できた溝状遺構であるが、幅は不明、深さは約20cmである。東側肩部からやや下がった位置に、約2m間隔で杭が4本確認できた。4本のうち、杭703のみ自然木で、その他は板状の加工が施されている。

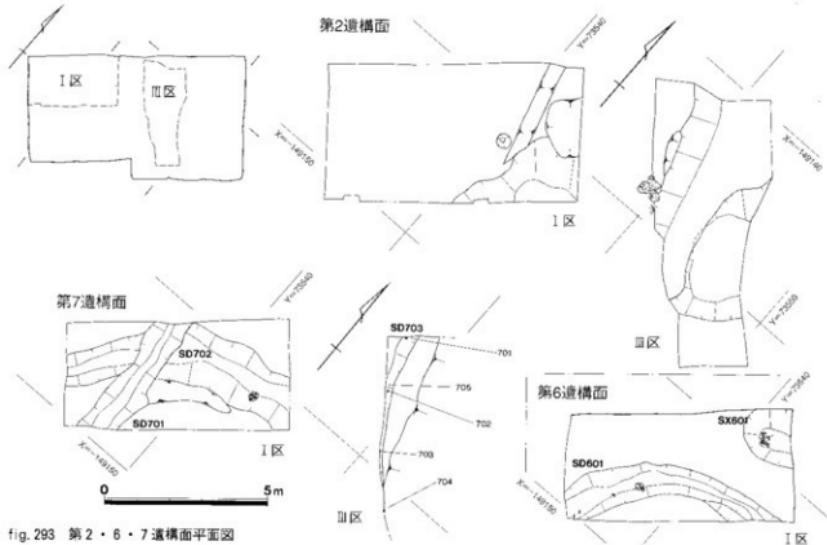


fig. 293 第2・6・7遺構面平面図



fig. 294 S D601



fig. 295 杣703

3. ま と め 今回の調査では、範囲が限定されていたにもかかわらず、さまざまな成果を得ることができた。遺構ではまとまりがないものの、奈良～平安時代の遺構の広がりとともに、さらに上層に平安時代後期～鎌倉時代前期にかけての遺構が存在することも確認できた。また、6世紀後半には妙法寺川の氾濫による流路が存在したことも明らかとなり、今回の調査地点の上流域に当該期の遺跡の広がりが推定できる。平成7年度調査の戎町遺跡第21次調査地点周辺がこれに相当するものと考えられる。一方、弥生時代中期では3面にもおよぶ遺構面も確認でき、大田町遺跡から戎町遺跡にかけての西浜西端の大拠点集落の存在も想定できる。

遺物では6世紀の流路内から突帯文土器が出土しており、戎町遺跡あるいは大田町遺跡のどこかで今後縄文時代晚期の集落も確認されてくるものと考えられる。また、各遺構面に対応する遺物がそれぞれ確認されている点も今後の資料的価値が高いものと言えよう。

以上のように、大田町遺跡の一端を明らかにできたものと考えられる。妙法寺川左岸域に立地する遺跡として、戎町遺跡とともに妙法寺川を起源とする土砂堆積を抜きには語れない遺跡変遷が明らかにできたものと考えられる。

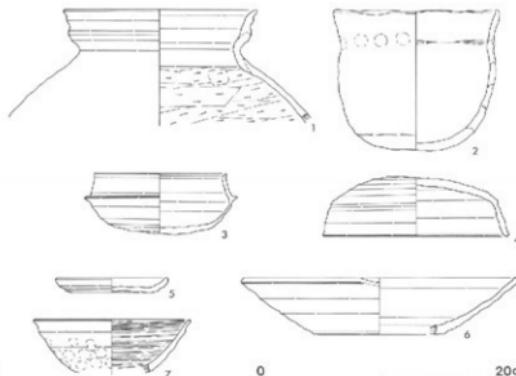


fig. 296  
出土遺物実測図

1～4  
古墳時代後期流路  
5～7  
S P121

## 49. 大田町遺跡 第12次調査

### 1. はじめに

大田町遺跡は妙法寺川左岸に形成された自然堤防上に立地しており、須磨区大田町付近の東西500m、南北300mの範囲に及ぶものと推定されている。特に奈良～平安時代にかけての遺構・遺物の出土が多く、古代山陽道の痕跡と推定される主要地方道神戸・明石線を軸とし、これと直交する南北に長軸方向をもつ掘立柱建物群の検出や縄文・灰釉陶器、瓦の出土のほか、第3次調査では『荒田郡』銘の陶硯片が出土していることから官衙施設の存在が可能性として考えられ、『須磨駅家』の比定地として注目されている。

さらに下層においては弥生時代前期の一括遺物や中期の竪穴住居、滑石製品が多量に出土した古墳時代後期の土坑が検出されるなど、戎町遺跡とともに妙法寺川流域に営まれた代表的な遺跡の一つとして挙げられる。

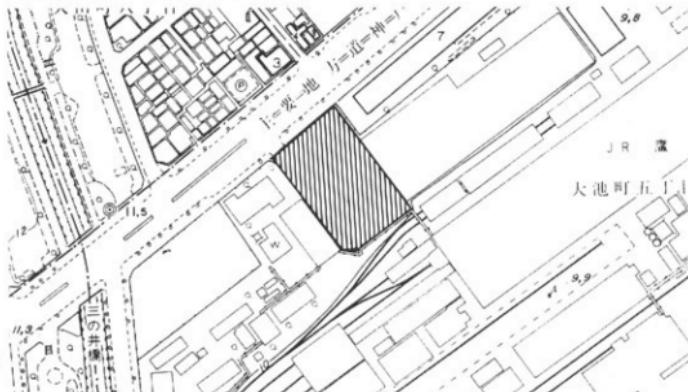


fig. 297  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査区の全面において、計4面の遺構面が確認された。

#### 第1遺構面

第1遺構面において、竪穴住居1棟、土坑、柱穴、溝多数を検出した。

#### 竪穴住居

一辺約5mの方形を呈する竪穴住居である。深さは10cmほどしか遺存していなかったが

#### S B101

北東部を除く床面の直上レベルから垂木材が炭化した状態で出土しており、焼失住居と考えられる。主柱穴は4本で、一部に不明確な部分があるが検出幅10cmの周壁溝が巡っている。西辺中央部には造り付けの竈を有し、竈内からは焼石、炭とともに土師器の甕などが出土している。古墳時代前期（布留式併行期）の住居址である。

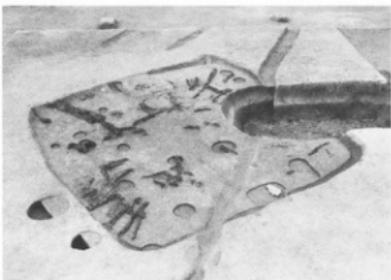


fig. 298 S B101

**土 坑** 6基の土坑が確認されたが、径2mを測るSK102を除き、いずれも径が1mほどで、断面の形状は浅い皿状を呈する。SK101から7世紀代の須恵器・土師器が出土した。

**溝** II区南半からIII区北半の間で直交する溝が多数検出された。切り合い関係が少なからず認められるが、方向による規則性はなく、ほぼ同時期の所産かと思われる。SD101とSD108の間に挟まれた範囲に集中し、北側では東西溝、南北溝が直交するが、南側では南北溝のみが並行して掘削されている。幅20~30cmで群溝は耕作に伴う痕跡と考えられる。SD183から7世紀初頭の須恵器が出土している他は遺物の出土は少なく細片の状態ではあるが、奈良時代の耕作痕かと考えられる。

**柱 穴** 今回の調査区では約20基の柱穴が検出されたが、建物などを構成する状況ではなく、掘形の径が20cmほどの小規模なもののが主体である。

**第2遺構面** 第2遺構面において、溝、土坑、掘立柱建物1棟と柱穴を検出した。

**溝** 計18本の溝が確認されたが、ここでは代表的なものについて記述を行う。

**SD201** 並行する6本の溝で、SD204は東側で弧を描くU字状を呈し、SD205から続くSD205(217)217の西側の折れ部に続く。各溝とも東西長約16mを測り、同一の長さで並行して掘削されている。溝の幅は60cmで、各溝間は2mを測る。溝の断面は浅い皿状で、一部に一段深くなる部分が認められた。SD204・205に遺物が集中する箇所があり、弥生時代後期後半



fig. 299 第1・2遺構面平面図

の土器が出土している。溝は一連のものと考えられ、性格としては畝溝が想定される。

S D210 またⅡ区の北側でも並行する3条の溝が検出され、この溝も畝溝と考えられるが、Ⅲ区  
~212 の溝とは方向が異なる。西端のS D210から弥生時代後期後半の土器が出土している。調査区の土層断面の観察により、本来は第1遺構面から掘り込まれたものと判断される。

**土 坑** 土坑を10基検出したが、ここでは主なものについて記述する。S K201は長径1m、短径80cm、深さ10cmを測る。弥生時代後期後半の土器、人頭大の石が出土している。

S K202は長辺1m、短辺60cm、深さ10cmを測り弥生時代後期後半の土器が出土した。

2基の土坑は切り合い関係から、いずれもS D201より後出する遺構である。

S K205は長辺1.4m、短辺1m、深さ10cmを測る。土坑の北壁に貼り付いた状態で非常に細かく破碎された土器が1点出土しており、弥生時代後期の甕と考えられる。

**掘立柱建物** S B201は南北3間、東西2間以上の建物である。柱穴掘形は径40~60cm、深さは最も

S B201 遺存状況のよいもので50cmを測る。Pit 201-03から弥生時代後期の土器が出土している。

またこの他にも調査区全体で柱穴が検出されたが、建物などには復元できなかった。

**第3遺構面** 第3遺構面において、竪穴住居2棟、溝3本、土坑8基の他、柱穴を検出した。

**竪穴住居** S B301は復元径約6mの竪穴住居と考えられる。床面では柱穴が1基と中央部分に溝

S B301 状を呈する落ち込みが1基検出されたが、中央土坑となるのは明らかではない。柱穴内



fig. 300 第3・4遺構面平面図

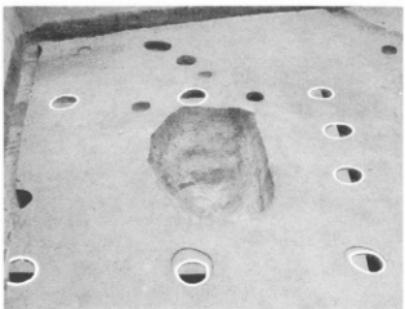


fig. 301 S B201

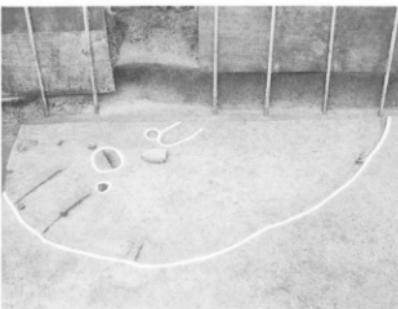


fig. 302 S B301

と床面から弥生時代中期の土器が出土している。

S B302 一辺約5mほどの方形の竪穴住居と考えられる。床面から柱穴が3基と土坑状の落ち込みが検出されたが、いずれも浅いものである。全く遺物が出土しておらず、時期は不明であるが、切り合い関係からS B301より古く位置付けられる。

S K304 長径約1.6mほどの楕円形の土坑と考えられるが、南半は搅乱により失われる。深さ約20cmが遺存しており、中から弥生時代中期の土器が出土している。底面に中央に削り残しにより周囲より高くなった部分が幅10cmで方形に巡っている。

第4遺構面 水田 先年度の調査で水田遺構が検出された面である。先の調査では一区画5~15m<sup>2</sup>ほどの整然と並ぶ区画が判明したが、今回は明確な区画を構成しておらず、上端幅約30~50cm、下端幅約60~80cmの方向性の判然としない高さ10cmの砂質シルトの隆まりを検出したに過ぎない。この不鮮明な畦畔もII区の中央以南では認められず、III区では南北方向の大畦畔と考えられる規模の大きな畦畔が1条確認された。大畦畔の規模は上端幅約1m、下端幅約2m、高さ20cmを測る。水田面では稻株痕と足跡と考えられる砂の溜まりが認められた。時期については明らかではなく、弥生時代中期以前の水田としか判断されない。

3. まとめ 今回の調査により、大田町遺跡の範囲がさらに南に延びることが明らかになった。

また、奈良時代の建物群は主要地方道神戸・明石線付近で収束し、南に続く自然堤防上の微高地には比較的高燥な土地を活用して畑が作られる状況が判明した。また調査区の東側には平成9年度の試掘調査により湿地状の地形が広がることが判明しており、水田となっていたことも想像される。大田町遺跡を『須磨駅家』とした場合、官衙施設とそれに伴う官人集落、生業域の在り方を考える上で貴重な資料となろう。

下層では弥生時代中期~古墳時代前期の遺構が確認され、各時期の遺構が従前より南に延びることが改めて確認された。古墳時代前期の竪穴住居の検出は当遺跡においては初めてで、南方600mに位置する古墳時代の集落遺跡である鷹取町遺跡との関連において注目されるものである。妙法寺川東岸の微高地(自然堤防)の広がりを示唆するもので、遺構がさらに南に続くものと考えられる。また弥生時代後期に属する耕作痕の検出は、今年度、南東約800mに位置する若松町遺跡で確認された弥生時代の畠遺構とともに類例の少ない事例として注目される。さらに今後、周辺での調査による類例の増加が期待される。

## 50. 須磨天神町遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

昨年度に引き続き、中央幹線（西須磨）街路築造工事に伴う小区画毎の調査を実施している。遺跡の状況は、遺物などを含む堆積層ではなく、遺構面の直上まで盛土である。

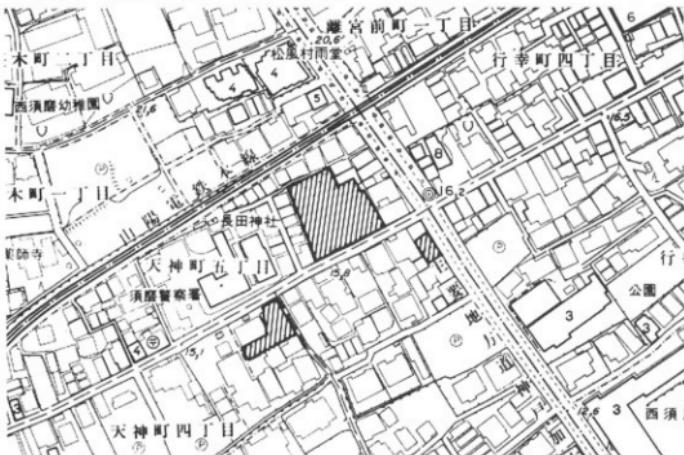


fig. 303  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査地全体に遺構が確認されたが、現地表から50~80cmで遺構面に達するため近現代の搅乱が全体に多く、それらのあいだに中世の遺構が残されている状態である。昨年度の調査にくらべて遺構残存の密度は低く、現西国街道以北の地区はさらに密度が低い。中世以降今日まで生活面は殆ど変わっていないものと考えられ、そのため井戸や比較的深いピット、溝などしか残らなかったと考えられる。

#### 第VII・XII地区

調査地は第1次調査の第II地区と第III地区の間にあたり、遺構の密度が希薄になりはじめるあたりである。検出された遺構は溝状遺構とピット、土器埋納遺構がある。石組円形



fig. 304 VII・XII区平面図



fig. 305 S X1201

を含む5基の井戸も検出したが、いずれも近世のものである（S E 1201, 1202は石組）。溝状遺構は幅80cm～1m30cmと一定でなく、深さは30cmである。遺物の出土ではなく、時期は不明である。ピットのうち、現西国街道にほぼ平行して2列のピット列がみられるが、南北方向の幅は約3mで一定しており東西方向は4個ずつであるもののそれぞれの列の間隔は不定で対照的ではあるが、掘立柱建物である可能性がある（S B 701）。ピット内からは、わずかながら中世に属する土師器片が出土している。

S X 1201 長径40cm、短径30cm、深さ4cmのピットである。ピット中から13枚分の土師器小皿と銅錢2枚が出土している。

第VII地区 第VII地区は昨年度調査の第I地区と第IV地区にかこまれる位置にあたる。

中世に属する遺構としては、溝1条、ピット5基、井戸1基である。第IV地区調査でみつかった近世の耕作痕の続きも検出している。

なお、特筆すべき遺物として遺構面の僅かな窪みの堆積土中から、「古大内式」の瓦当片が1点出土している。

S D 801 幅50～80cm、深さ20cmの北西から南東に流れる、やや蛇行ぎみの溝である。溝中からの遺物は少ないが、中世に属るものと考えられる。

S E 801 木組円形桶型積み上げ型の井戸である。掘形は約1.7m、深さ約2.7mの円形で、そのは



fig. 306 S E 801

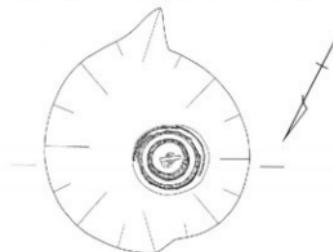


fig. 307 呪符木簡実測図

「呪天罫鬼屋急々如律令  
井」

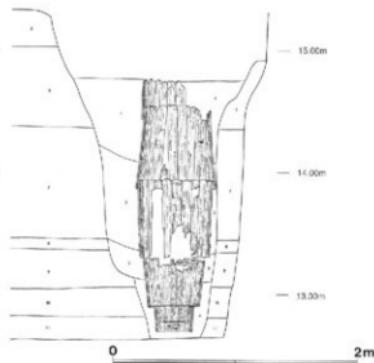


fig. 308 S E 801平面図・断面図

ほぼ中央に径30cm、高さ21cmの水溜用の桶側1個を正位に置き、その上方に径50cm、高さ40cmの、さらにその上方に径約60cm、高さ65cmの桶側を上下逆にして2段積み上げ、そして最上段にはほぼ同規模と思われる径50cm、高さが残存高で30cmの桶を置いている。それぞれの桶同士は約5~10cmを重複させている。

井戸内からは、底付近で「咄天罡鬼魘急々如律令」「井」と書かれた呪符木簡1点と土師器小皿2枚、石英粒1個が出土した。井戸掘形からの遺物に出土もなく、15世紀頃に築造されたと考えられる。

#### 第IX地区~

IX~XIV区（以下「北地区」とよぶ）は現西国街道以南の各調査区に比して遺構・遺物ともに少なく、中世に遡るものは僅少であった。表土・搅乱土直下遺構面の状態は変わらず、北方に上がるにつれさらに浅くなっている、後世の削平も相当うけているものと考えられる。ピットも全体的に散漫で、建物を構成しうるような柱穴列は確認できなかった。

特筆すべき遺物として、縄文時代早期のと考えられている異形局部磨製石器が1点、黒灰色シルト層中より発見された。法量は、長さ3.4cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmを測る。石材はチャートで、灰白色で黒色の縞模様がある。断面は凸レンズ状、調整剝離は精密、磨痕は先端部・側縁部・体部上半抉り付近まで及んでいる。脚部は薄く側縁からのラインから少しくびれて外側に若干開いている。

#### S E901

石組円形井戸である。掘形は径1.7m、深さ1.5mの円形で、ほぼ中央に径70cm、高さ1mの石組井側を据える。その下部に桶1個を置く。桶は径44cm、高さ56cmで竹製籠が3段ある。出土した遺物から近世のものと考えられる。



fig. 309 VII区・IX~XIV区平面図

P217-309

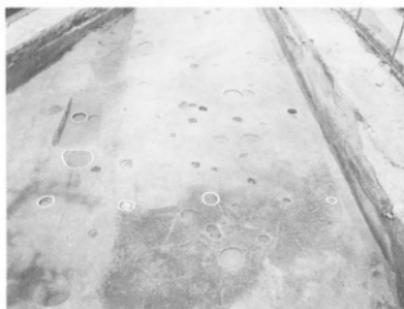


fig. 310 S B701



fig. 311 S E1401

S E1101 石組円形井戸である。掘形は径1.6m、深さ1.5mの円形で、ほぼ中央に径70cm、高さ90cmの石組井側を据える。最下段は小口が20×50cmの大きめの石5個を五角形に配し、その上に20~30cmの比較的大型の自然石を円形に組み上げている。また井戸掘形の四隅に径25cmのピットを4つ配しており、覆屋の存在を予想せしめる。

S E1401 石組円形井戸である。掘形は径1.7m、深さ1mの円形で、ほぼ中央に径70cm、高さ1mの石組井側を据える。最下段は長軸65~70cm、短軸50cmの紡錘形に石を配し、そのうえに梢円形に石を組み上げている。開削は近世以降と見られる。

S X1301 5.5m×4m、深さ70cmの隅丸長方形の池状の遺構である。埋土上層で10~20cm大の礫が放り込まれたように堆積しており、礫を除去した淡褐色粗砂層上面から土師器の小皿が十数枚分の他、石鍋片などが出土している。東側肩部には護岸のための石積が2段構築され、石の欠落している部分には杭を3本打ち板を渡してしがらみを組んでいる。

3. まとめ 周辺は、昨年度の第1次調査を含めてかなり広範囲に調査をおこなってきたが井戸は多く検出されたものの後世の削平のためか柱穴は少なく、建物を構成するような柱穴列は1棟に止まっている。

調査地の中央東西に現西国街道が通っているが、街道に関わる遺構・遺物については今回も検出されなかった。ただし、古代山陽道のルートを考えるうえでの資料として「古大内式」の瓦当片が出土している。この瓦は神戸市内において、吉田南遺跡、白水遺跡に続く発見である。しかし、これ以外の奈良時代の遺物は確認されておらず、山陽道に関わる遺構も検出されていない。

また、流入とは考えられるが、異形局部磨製石器が出土したことでも注目される。阪神地域では、須磨区境川遺跡や芦屋市山芦屋遺跡で発見されており、いずれも縄文土器を伴っているが、天神町遺跡では縄文土器は出土していない。

全体に遺構は検出されるものの、集落の景観を復元するには、なお調査が必要である。

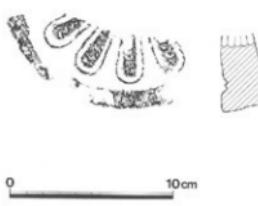


fig. 312 出土瓦実測図

## しらみずひさごづか 51. 白水瓢塚古墳 第5次調査

### 1. はじめに

白水瓢塚古墳は、明石川の支流、伊川右岸に位置するシンド山あるいは薬師山と呼ばれる丘陵尾根上に立地する。古くから古墳として知られており、古墳のくびれ部に大正13年(1924)年に伊川谷村によって建てられた「史跡 瓢塚古墳」の碑がある。

大正末年から昭和初年、直良信夫氏によってこの古墳は踏査および発掘調査が行われ、白水薬師山古墳の名で一部報告がなされている。これによればこの古墳には三重に円筒埴輪列が巡り、古墳の周囲には100基以上の埴輪棺の存在することが確認されている。

近年に至りシンド山丘陵の開発計画がおこり、これにともなって、古墳の規模、また埴輪棺の有無など周辺の状況を確認するため、昭和61年(1986)以降4次にわたり試掘調査が行われた。昭和62年(1987)の第2次調査では、埴輪の埴輪列が確認され、埴長が57mであることが確認された。また、古墳の南東にのびる尾根上、北側の平坦部に埴輪棺などの埋葬施設が確認された。



fig. 313  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

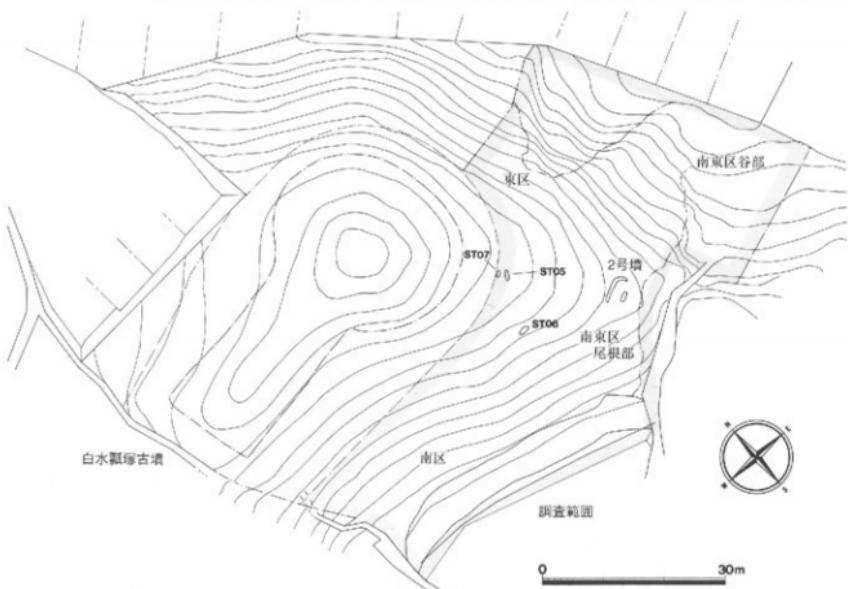
一連の試掘調査の成果に従い、白水瓢塚古墳について後円部裾から5m、前方部端で幅43mの盾形の範囲を現地保存することが地権者との協議で申し合わされていたが、古墳の保存範囲外で宅地造成が計画され、この範囲について発掘調査を実施した。

#### 南北区

1a層～1b層から埴輪片・須恵器片・近世の陶磁器片が出土している。埴輪は円筒埴輪がほとんどである。

#### ST 06

東～西に主軸をもつ土坑。長辺約260cm・短辺約80cm・遺構確認面からの深さ約20cmをはかる。土坑の形状などから埴輪棺の墓壙と考えられる。粘土などは確認されず、いわゆる直葬である。原位置にあると思われる破片が一部のこるもの、埴輪は大部分が抜き取られている。墓壙内の土はすべて水洗いしたが副葬品等の出土もなかった。埴輪は普通円筒で、胴部に刻線をもつものが現地で確認されている。



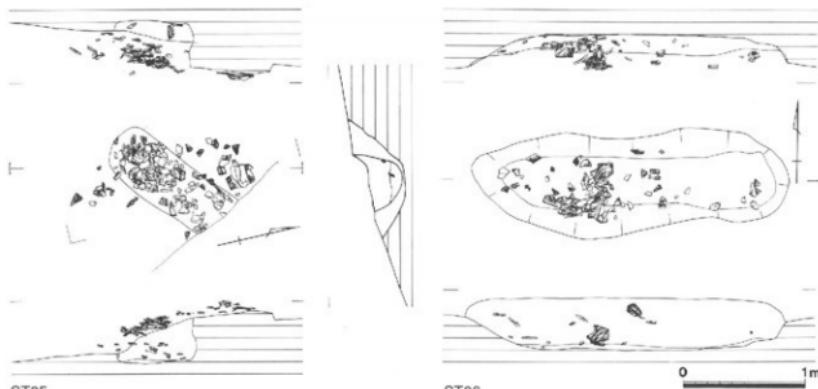


fig. 316 S T 05・06平面図・断面図

**南東区尾根部** 昭和62年の試掘調査で、2号埴輪棺（S T 02）と1号木棺墓が確認され、発掘調査が行われている。新たに5号埴輪棺・7号埴輪棺（S T 05・S T 07）が確認された。

**S T 05** 南西-北東、尾根の背にはほぼ直行する主軸をもつ土坑。北東半は搅乱を受け遺存しない。掘形の幅は約110cm。埴輪棺の墓壙と考えられ、舟底形の棺の陥没部は幅約45cm・遺存長110cm。盗掘のためか、陥没部内には原位置を止めない円筒埴輪片が残されているにすぎない。また、遺構の検出面で埴輪片が集中して出土したが、これらは上位からの流れ込みで、直接この遺構に伴うものとは考えられない。最終的には下層の破片との接合関係でその帰属を確認したい。

**S T 07** 今回の調査で唯一良好な状態で残されていた埴輪棺。西南西-東北東に主軸をもつ。墓壙は約130×約55cmの不整楕円のプランで、深さは遺構検出面から約40cm。朝顔形埴輪1本を棺としている。基部を西、壺部を東に向ける。底面は東がやや高い。壺頭部以上が欠かれ、壺部口縁破片等で小口部分などの穴をふさいでいる。粘土などは確認されず、いわ

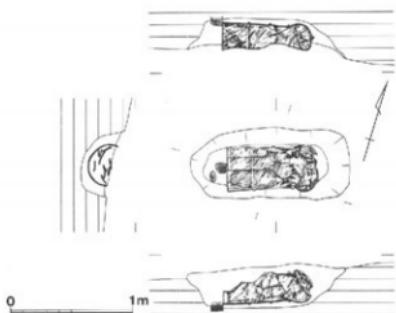


fig. 317 S T 07平面図・断面図



fig. 318 S T 07

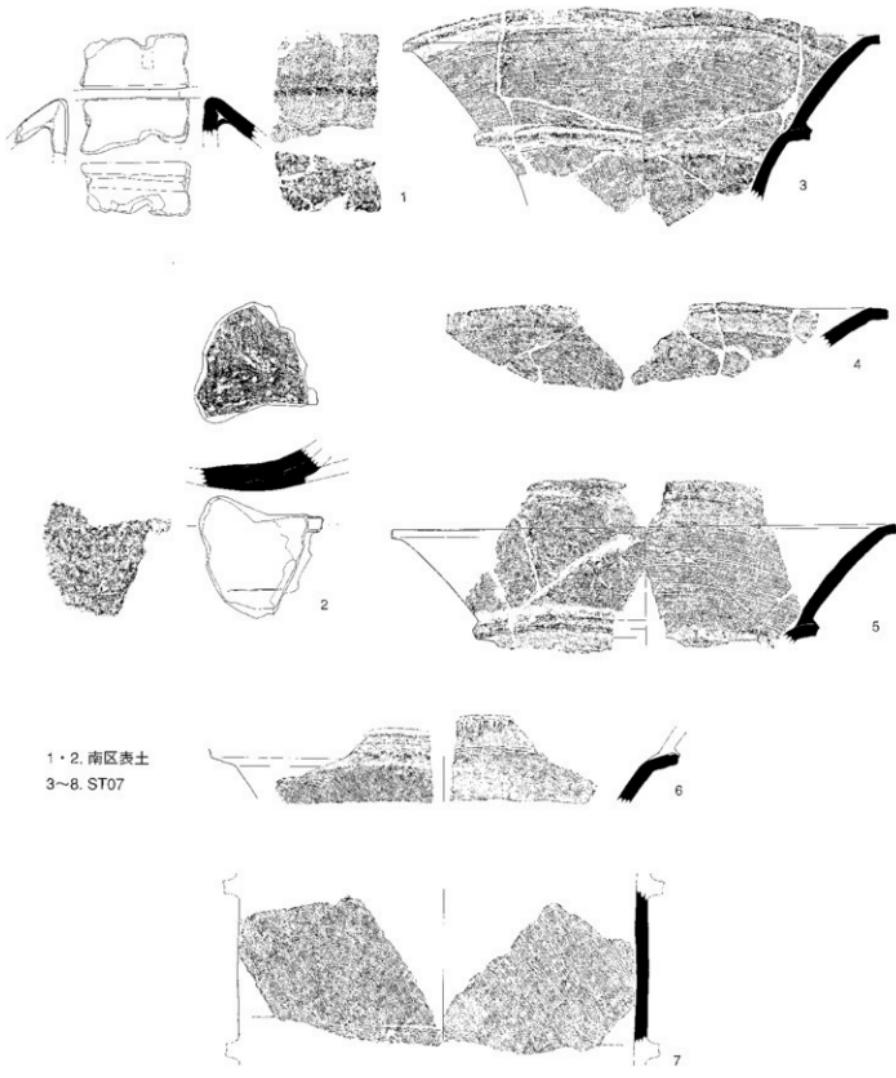


fig. 319 出土遺物実測図 1

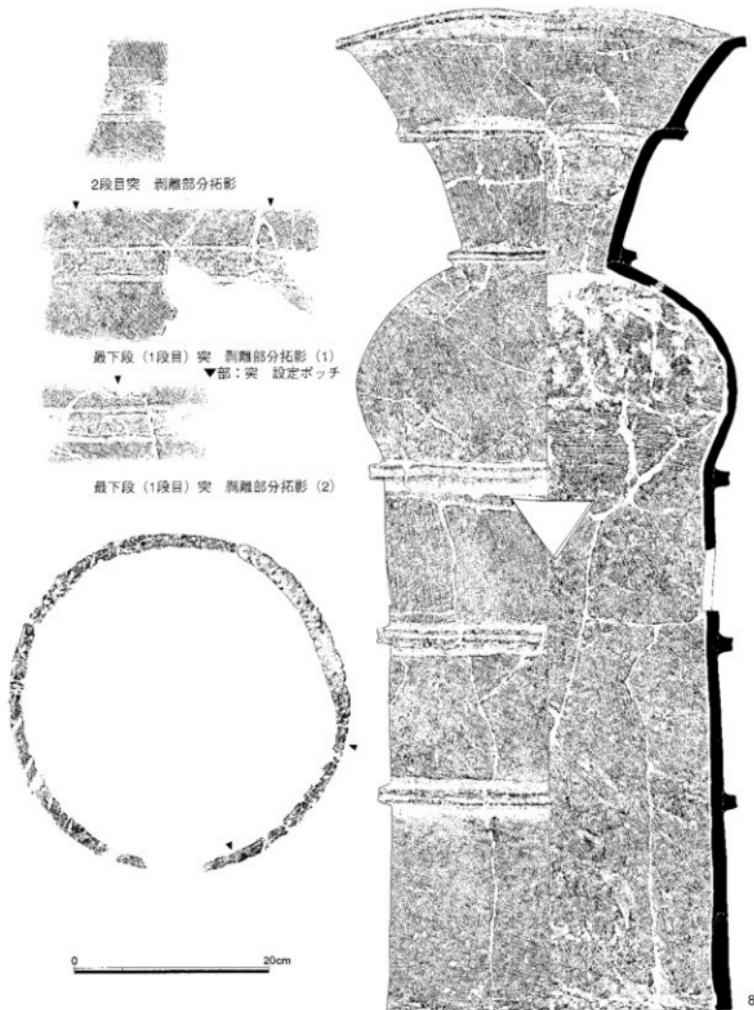


fig. 320 出土遺物実測図 2 (ST 07)

ゆる直葬である。棺内の土砂はすべて水洗いしたが副葬品はなかった。この朝顔形埴輪は高さ100cm・壺部口径42cm・胴部径34cmをはかる。胴部突帯3条をもち、最上段に三角形のスカシ2対が千鳥状に配される。この朝顔形埴輪は、現在筑波大学に所蔵されている直良氏調査の第1号小棺と器形・調整の手法などがほぼ共通しており、同工品と判断される。

#### 2号墳

昭和62年の試掘調査で確認された1号木棺墓を埋葬施設とする方墳。今回の調査によって北辺と東辺を画する周溝が検出され、方墳であることが確認された。古墳の南西部で供獻土器と考えられる古墳時代後期の須恵器甕が出土している。埋葬施設がマウンドの中央にあると仮定すると一辺8mほどの規模になる。封土はほとんど残らない。

#### 南東区谷部

尾根斜面が崩れ、谷となる部分である。転落した埴輪片が多数出土している。

この谷および尾根部の切り通しの位置関係を直良氏の報告と照合するとこの地点が直良氏の調査した第2～4号棺のあった部分であると推定でき、ここで埴輪片が表面採取された。また、古墳状の土地の隆起も確認されている。南東区谷部上位の尾根部分も、南東区谷部からの遺物の出土状況、そして直良氏の記録から考えると、ここに埴輪棺がかつて存在したことは明らかで、今もいくつかが残っている可能性は十分考えられる。

#### 東区

東区は斜面裾部の工事範囲について改めて試掘調査を行ったが、若干の遺物が出土したもの、遺構等は確認されなかった。

#### 3. まとめ

試掘調査の結果と合わせ、丘陵の尾根鞍部付近に点々と埋葬施設の存在することが確認された。今回2号墳がマウンドをもつ古墳であることが確認できたが、埴輪棺群も密接せず、ある程度の間隔をおいて存在している。これらの埴輪棺も本来ある程度のマウンドをもつ墳墓であったことが推測できよう。南側斜面では土砂の流出もあってか埋葬施設はほとんど確認できなかった。直良氏の報告した多数の埴輪棺は瓢塚古墳の埴丘裾部と古墳から続く尾根鞍部にあったものと推測される。



fig. 321 2号墳



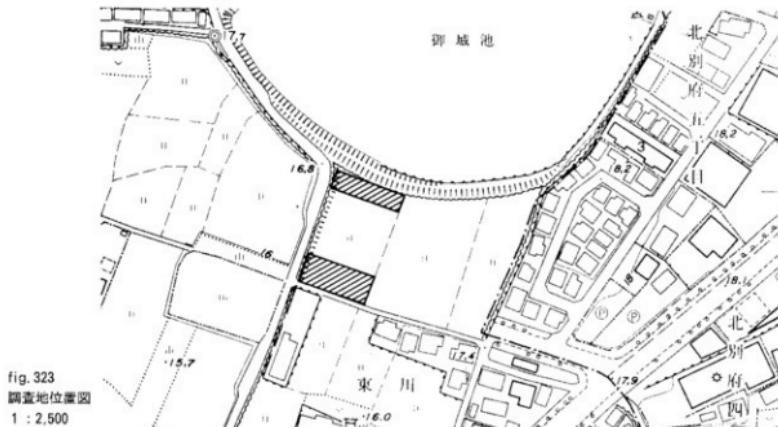
fig. 322 2号墳平面図

## しらみず 52. 白水遺跡 第7次調査

### 1. はじめに

白水遺跡は伊川右岸の沖積地に立地し、北は天王山古墳群・白水廬塚古墳の存在する丘陵をひかえている。南方の沖積地には弥生時代前期から中世にかけて存続する新方遺跡、古墳時代の洞和遺跡が知られている。

これまでの調査では、弥生時代後期から鎌倉時代という時代の様子が明らかになってきている。特に古墳時代中期の住居址や水田址は、集落の様子をある程度復元可能なものとしている。また第4次調査においては、平安時代の梵鐘鋳造遺構が見つかっており、鋳型も出土している。



### 2. 調査の概要

今回の調査は土地区画整理事業に伴う調査であり、2ヶ所にトレンチを設定した。

#### 第1トレンチ

第1遺構面は調査区の北西側に水田址が確認された。時期は中世と考えられる。

#### 第2遺構面

第2遺構面は灰茶色シルトをベースとする遺構面で、古墳時代前期の竪穴式住居（S B 01）や、ピット等が確認された。

#### S B01

S B01は一辺約5m、深さ約30cmの良好な状態で確認された。周壁溝はすべてに回っており、土坑がその周壁溝を切る形で存在している。住居内の主柱穴は4基が確認できた。なかでも内2つには柱材が残っており、長さにして約60cmと良好な状態であった。

土坑は4基あり、その内の2基は（SK03・SK05）は周壁溝を切る場所に存在している。その土坑内からは、小型丸底壺や高环等がまとまって出土している。また中央やや南寄りの土坑は浅いものの炭が入っていたことから、炉であろうと思われる。

#### S B02

S B02は3間分のピットが確認され、いずれも掘形の深さ50cm程度のものであった。遺物はほとんど出土していないが、S B01と同時期と考えられる。

#### 自然流路

調査区の東側は、埋土に礫を含む流路状のものがはしり、弥生土器が含まれていた。

- 第2トレンチ  
第1遺構面  
第2遺構面
- 第2トレンチは、安定した遺構面はトレンチ内の3分の2程度であった。  
第1遺構面は第1トレンチと同じく水田址が検出されている。  
第2遺構面は東側で埋土が黒灰色粘土の自然の落ち込みが確認され、古墳時代前期の土器を含んでいた。またピットが若干確認された。

3. まとめ

今回の調査はすぐ北に御城池をひかえた場所であったせいか特に第2トレンチでは安定した遺構面が存在しない場所もあり、また遺構も自然に形成されたものが目立った。

しかし古墳時代の竪穴式住居が1棟ではあったが完全な形で調査できることは、白水遺跡の集落のありかたを考えていく上での、貴重な資料になると思われる。

この調査は、土地区画整理事業の最終段階にあたり、白水遺跡の調査としても7次にわたっているが、白水遺跡は自然に形成された流路や溝を利用することによって集落を形成しているということが考えられる。



fig. 324  
調査区遠景

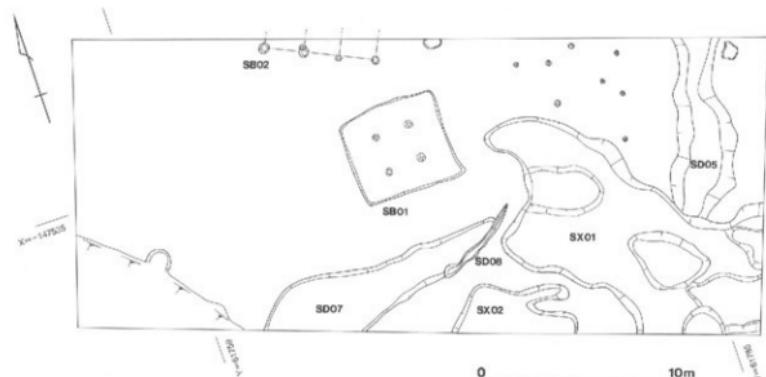


fig. 325 第1トレンチ第2遺構面平面図

P226-325

## 53. 水谷遺跡 第7次調査

### 1. はじめに

水谷遺跡は、榎谷川と伊川に挟まれた標高約40mの南北に延びる中位段丘上に位置している。この段丘の北側の丘陵上には、弥生時代中期の高地性集落である青谷遺跡がある。また、段丘の西側斜面には、弥生時代後期から平安時代後期にわたる集落遺跡である高津橋・岡遺跡がひろがっている。

水谷遺跡は、平成3年度に区画整理事業に伴う発掘調査を実施して以来、調査は6次を数える。平成7年度に大東地区で古墳の痕跡が確認され、平成8年度には帆立貝式古墳が発見されている。このため、水谷地区の区画整理事業地内の畠や水田には、削平され埋没した未確認の古墳が少なからず存在することが予想された。

今回の調査地は、平成8年度に調査を実施した帆立貝式古墳水谷大東古墳の南西200mにあたり、土地区画整理事業地内の街路整備予定地に限定して調査を実施した。

調査の結果、埴輪が囲繞する方形墳もしくは帆立貝式古墳の方丘部をめぐる溝を検出した。年代的にも大東古墳と相前後することから、同一の古墳群のなかで築造されたと推定され、地区の大字名をとって水谷2号墳と呼称することとした。



### 2. 調査の概要 検出遺構

調査の結果、調査区北東隅で鎌倉時代の土坑1基と古墳時代の土坑1基、溝3条を検出した。

溝は、後世の搅乱・削平を被りながら残存する方形墳に伴う周濠と考えられた。

**S D01**

調査区中央で検出した南北方向の溝である。溝の北側は近現代の搅乱により壊滅している。溝の規模は、溝上端の幅5.4m、底部で2.0mで深さ40cmを計測する。断面形は逆台形で、古墳外側の溝肩は後世の削平と流失を被り緩やかに傾斜する。溝は、埴輪側溝肩の北部で西に屈折する部分があり、古墳の北西コーナーにあたる可能性がある。

**S K01**

S D01の北東部溝底で、一辺60cmの方形掘形をした土坑を検出した。土坑の深さは20cmで断面形はほぼ垂直に掘られていて、方形を呈する。埋土上層及び周辺からは、朝顔形埴



fig. 327  
S D01遺物出土状況



fig. 328  
S D02遺物出土状況

輪上部の破片が集中して出土している。埋土下層には、炭化物を含む黒灰色シルトが充填されていたが、埴輪等の遺物は出土しなかった。

**S D02** 調査区西端で検出した南北方向の溝である。溝の北東部は近現代の搅乱によって壊滅している。溝の規模は、溝上端の幅4.3m、底部で2.0mで溝上端からの深さ50cmを計測する。断面形は逆台形で、古墳埴丘側にあたる東側肩部は、埴丘盛土の残存状況も良好で深く溝を残している。古墳外側にあたる西側肩部は、調査区北西隅で辛うじて一部検出したにすぎないが、地山面を段状に掘り込む緩やかな傾斜面となっている。

**S D03** 調査区北辺沿いの近現代の搅乱坑底部で辛うじて検出した東西溝の底部である。検出した長さは3.5m、深さは5cm前後を計測する。溝の埋土は黒緑灰色シルトで、埋土内からは、円筒埴輪片がまばらに、溝底よりやや上部で出土した。